

元五十俵五
一三拾九俵四

御代官

現石拾五石五斗九升七合

一御徒士目付御役料是迄之通被成下候事

一御代官附人は迄之通被成下候事

但、右之外ハ不被成下候事

一下人扶持是迄之通無増減相渡候事

一新知御加恩等被成下候節一ヶ年分被成下御止メ之事

三月

三三 家中への融資困難を令する (嘉永元年七月朔日)

御勝手方御難渋之段ハ毎以申達一同承知之次第、殊ニ
昨年凶作猶々必至と御差支ニ相成、勿論程々御取縮有
之候得共、何分積年之御借財彼是差湊夥敷儀ニ而御物
成も過半御借入之口々江御差入ニ相成、此所兼々御心
痛被遊候事ニ候、尤御用達之面々は迄段々深き御義理
合茂有之、甚以不本意ニは候得共、所詮此分ニ而は御
立行難被遊、無御余儀御訳柄御頼有之、今般近国自他
とも是迄御借財之分当中年々来ル (嘉永元)
(嘉永三) 戊午年迄三ヶ年之内不

残御借据被仰出候、右ニ付而ハ追々其廉は相立可申候

得共、当座之所ハ却而必至と御融通筋御差支ニ付、是

迄元方御勘定奉行共心得を以益暮暫時取替遣し候分、

以後少分たり共取斗難相成段申談置候間、其旨可申相

心得候、尤御家中ニ而も極難渋之中氣之毒ニは候得共、

御時節柄致恐察、此上別而常々質素節儉を遂げ、一家

取統御奉公無御間欠精勤致し候様肝要之事ニ候、

七月朔日

三四 他所銀札通用禁止令 (嘉永二年五月十五日)

他所銀札致通用間敷旨申触置候処、近来多分取扱候哉

ニ相見へ候、以後急度差留候間、豊岡札之儀ハ是迄之

通、其余他所銀札之儀は一切致通用間敷候、此上心得

違之族有之は急度可申付候、

五月十五日

3 多田弥太郎上訴事件と文久の政変

三五 元方義倉銭札、半額にて引き替え

『高柳村御用状控帳』八鹿町中央公民館蔵

去未八月義倉方貸附不納多ニ付、是迄引替滞居候処、元方丁百文通用之銭札此度五割之割合を以引替を可申、并為融通百文通用之札、新ニ致加印差出候間、無差支可致通用候、
(嘉永二年) 酉七月

三六 山之中の三人、義倉銭札加印仲間に

『高柳村御用状控帳』八鹿町中央公民館蔵

出石郡山之中

平田村

五左衛門

久畑村

理右衛門

中山村

三郎右衛門

右三人義倉銭札加印之上引替も致候間、其旨相心得可申候、
(嘉永二年) 七月

三七 多田弥太郎、大砲試射願 (嘉永二年十月十三日)

多田弥太郎

一 右西洋流大砲先年九州辺ニ而伝授受来り候付、何卒試申度旨相伺候処、何分稲作有之内ハ御田所之故障ニ而可相成ニ付、先ツ刈入其処見合候様申談、此節刈入□相済候趣ニ付、来ル十七日室之代中程ヨ四谷ニ向砲放仕度旨御用人を以相伺候付、則御側御用人を以相伺候処、伺之通被仰出候付、其旨申談、
一 右ニ付為御覧被遊御出候旨被仰出、且御年寄御用人共ハ見物罷出候様被仰出
一 御覧場所之儀相選候様御普請奉行江御用人を以申談候処、式本松之辺宜趣申達候付、御用意并往来留等之儀、夫々江可申談旨御用人江申談、

一 右之趣相心得候様、御目付江申談

(嘉永二年十月十七日)

多田弥太郎

右此間申達候通、室之代ニ而西洋流大砲今夕七ツ時
ヲ放発致候付、八ツ時□御供揃ニ而二本松繩手御か
さみ江為御覽御出被遊、

一 御出前ヲ右馬助・内蔵介并御用人共罷越居、御出之
節御かさみ先ニ御出迎仕り、御帰之節茂同様、

但、御用番并御用人・両奉行・勘定奉行・月□見性寺
江罷出見物、

一 一夜五時比相濟、即刻御供揃ニ而御帰被遊、

一 多田弥太郎

右御覽所ニ而御目見被仰付候由、依而御礼申達、翌
朝達御聴、

三六 元方義倉錢札引き替え休止、以後勘定所扱いに

(嘉永二年十一月十二日)

町在へ

義倉方今般御改革、御勝手方一体ニ相成候付、右取調

中元方錢札引替之儀者当分休日、尤上納ニ者御勘定所

ニおいて受取候間、是迄之通、通用可致事

但、右之外加印錢札は是迄之通無滞通用可致事

十一月十二日

三九 桜井一棹(一太郎)、義倉方出役差し留め

(嘉永二年十一月十二日)

一 左之通被仰出旨、御用人ヲ以申談、

父一棹儀
(伯名一太郎)

思召被為在候付

桜井宣藏

義倉方江出役之儀被差留候事

但、万端遠慮罷在、親類之外、面会致間敷候事

三〇 元方義倉錢札、通用停止

『高柳村御用状控帳』 八鹿町中央公民館藏

義倉元方札所持之面々、取調書上候分難波之趣相聞候
間、明十六日、明後十七日兩日之内引替遣候間、元方

御勘定所へ可致持参、此後右元方札取引致間敷候、尤外加印札是迄之通り可致通用候、右之段村々江不洩無遅滞可申談候、以上

(嘉永二年)

十一月十五日

工藤市郎右衛門

福田宗右衛門殿

長嶋善右衛門殿

三三 元方義倉錢札、銀札に統合

(嘉永二年十一月十七日)

町在へ

元方錢札之儀、上納ニ者於御勘定所受取、通用是迄之通と申触置候処、下分差聞之趣も相聞候付、此節銀札引替遣候上者、以来上納ニ請取不申候事

十一月十七日

三三 多田弥太郎、銀二枚下される

(嘉永二年十二月七日)

一 銀式枚

多田弥太郎

砲術之儀ニ付、遠国江茂罷越、心懸骨折候段太儀ニ被思召候、依之御舍之儀も被為在候得共、此時節柄儀付、乍御心外不被及其沙汰、右之通被成下候事

三三 海岸防禦兵員訓練に関する伺

(嘉永三年正月六日発の便) 正月十七日の項に記載

(前年)十二月廿九日

御用番様ヲ御留守居御呼出ニ付罷出候処、御伺書御附札ニ而相濟候段申達、

私在所但馬国於出右領内人数定置馳引稽古仕候節へ是迄玉込無之鉄砲相用來候処、近来異国船渡來之節防禦警衛等之儀、厚被仰出候御趣意も御座候付而へ猶更勢揃人馬馳引稽古為仕度、且陣取之形容行軍備立穩便試等為仕度、其節は於城内外野裝束・陣羽織或ハ甲冑・具足・鳴物・武器等相用、玉込無之鉄砲打放、尤事ケ間敷無之様稽古為仕候而も不苦儀ニ御座候哉、此段奉伺候、以上

十二月

御名

二 御用部屋日記

御附札

可為伺之通候、尤城外ニ而ハ甲冑相用候儀、可被致無用候、

三四 義倉錢札鏝屋札引き替え休止

『高柳村御用状控帳』 八鹿町中央公民館蔵

鏝屋

舛次郎

右主人甚兵衛江引合之儀有之、上京致し候付、対談中引替休日相成候間、右加印札有高御取伺之儀有之ニ付、村々員数相改、来ル廿八日迄可申達候、此段申入度如件候、以上

(嘉永三年)

二月廿五日

工藤市郎右衛門

福田宗右衛門殿

長嶋善右衛門殿

義倉江出張罷在候鏝屋甚兵衛手代舛次郎儀、役筋へ届ケ無之所出立、右は主人甚兵衛江為引合上京之趣、途中申越候付、早速呼戻可及対談候得共、夫迄之処引

替相休ミ、且上納銀ニも不相成候而は、一同近年難涉

之上、旧年は格別年柄不宜、別而可為迷惑と察入氣之

毒ニ候得共、御勝手方も必至御手間之御時節、其上旧

冬も義倉元方札多分引上ケ、又候此度之儀故、色々致

心配し而も、一時ニ引上ケ候様之義出来難致、左候而

ハ不慈悲とも可存候得共、何分差当り一同之難涉筋救

遣候様之取斗方(討以下同)、力ニ及ひ兼候間、暫之内如何様も繰

合相凌候様可致候、其内ニ甚兵衛対談済之上、御取斗

方も可有之、只少分上納銀之内十分一義倉札受候、上

納可致候事

(嘉永三年)

戊二月

三五 海岸防禦出陣の節、心得 (嘉永三年四月十五日)

海岸人数出陣之節

一久美浜御代官所々御人数催促申来候節、御櫓ニ而太鼓統打致し候間、右ニ而惣勢表御門前江相揃ひ可申事

一 表御門前江揃場所掛札出来之事

一 組頭以上陣笠・陣羽織・小袴着用、其余陣羽織・股引之事

但、陣羽織所持無之面々ハ御貸渡候付、御槽ヲ受取平生所持可致候事

一 腰兵糧面々持参之事

一 具足拝借之面々御武具役江承合着^(用カ)相試、名印附置可申事

一 小頭已下笠・陣羽織御槽ヲ受取、頭々ニ而預り置可申事

一 下人法皮・笠等、御槽ヲ請取、平生所持可致事

但、襟先ニ自分役付可申事

一 御先手御弓鉄砲頭之内宥人、組子召連先立而場所江罷越、時宜見斗^(斗)可申事

一 御賄役先立而罷越、兵糧等可致支度事

一 兵具一式船廻し之事

御武具役・下役并御職人召連罷越候事

一 表御門前江御目付・御徒士目付罷出、行列裁許可致

事

四月

三六 海岸防禦出陣には、成丈ヶ銘々所持の武器を

(嘉永三年四月二十一日)

海岸防禦

御手組面々江

当御時節之儀ニ付、武器修覆不行届之面々江ハ、着具得道具拝借可被仰付旨、先達而被談置、其御手当者有之候得共、何分必至御手詰之中故、一統致恐察候而、可相成丈ヶ銘々所持之武器等相用ひ可申、若し所持致しなから拝借不相願而は不相濟心得ニ有之候而ハ御趣意ニ違ひ候付、此段為心得申達置候、

四月廿一日

三七 丹組、義倉加印札発行

『高柳村御用状控帳』 八鹿町中央公民館蔵

先般丹組引受之義倉加印札通用申触置候処、今般

丹後

小室八藏

三上金兵衛

山本善次

右之面々改メ致加印、差出候間、丹組加印札と言更へ

可致通用候、

(嘉永三年)

戊五月

三六 出石藩領、洪水被害届 (嘉永三年八月十四日)

口上覚

私在所但馬国出石郡・養父郡領分八月五日夜夕風雨強、

同六日・七日・八日洪水ニ付、水入并風雨痛破損之旨、

一 高九千五百 [] 石老斗九升七合 田畑砂入・川欠

水押・風痛共

一 道切・田地開・土手切 式千九百六拾貳間

一 倒木 百三拾四本

一 山拔・岸崩 百九拾ヶ所

一 堰流

百貳拾ヶ所

一 橋流

四拾八ヶ所

一 水門算流

三拾五ヶ所

右之通ニ御座候、城内無別条、人馬怪我無御座候、毛

損高之儀は収納之上御届可申上候、已上

八月

御名

三六 出石町内洪水被害状況 (嘉永三年九月三日)

今日之風雨谷山川筋殊之外出水、右故哉、水勢烈候付、

川筋往来一面之水ニ相成、欄干橋上服部習之助御 []

下岩鼻往来、宗鏡寺町丁字屋辺迄一面川原ニ相成、却

而元川筋ハ石砂ニ而埋り実ニ前代未聞之事、岩鼻酒井

六郎右衛門門并内庭之分流レ、心光院橋流レ、宗鏡寺

町石橋中程落、然中欄干橋辺之水、材木町へ溢レ、東

御門之方へ突当、殊ニ御城山之水烈しく、上ハ堀一面

之出水、右故哉、東御門前切レ、其水内町へ流レ込并

大手門^(總)堵水強く、左右之駒寄セ倒れ、田結庄町上へ流

レ込、内町家不残床へ上り、八木町上田吉郎右衛門宅
辺迄も床へ上、本町下なども床へ上り、鉄砲町辺など
も強く、杉原〔 〕石砂入、金沢宅など水床へ上り、
昌念寺御廟の辺余程欠き、其辺大木三本根こぎニ相成、
如来寺・真光寺前松根こぎニ倒レ、其外数ヶ所大破損、

三〇 幕府へ提出の出石藩洪水被害届

(嘉永三年九月六日)

口上覚

私在所但馬国出石当月二日夜々風雨強、同三日洪水、
城下川水常水ニ壱丈余相増、三之丸東門外堀土橋橋
屋石垣共押流レ石砂入、同所堀続石垣・土手崩、追手
門前外堀石垣損、外曲輪塀所々倒、同所堀江石砂入、
并侍屋敷所々水入大破、城下橋々過半落、相残候分茂
大破ニ相成、其外所々山崩・土手切・道切、在・町水
入流家・崩家等〔 〕領分之内先達而水入候田畑之余
茂此度一円水押相成申候、委細之儀者未相知不申候得

共、先々此段申上候、以上

九月

御名

三一 諸職人并諸商売物直段方支配設置

(嘉永三年九月十七日)

一 左之趣御用人を以申談、

御勘定奉行

太田彦太夫

御郡奉行・町奉行

岡部鉄五郎

御普請奉行加り

田中伊兵衛

右諸職人并諸商売物直段方支配被仰付候間、^{(儀)以下同}厚く申
合遂吟味可申付事

九月十七日

一 左之趣可申談旨町奉行江申談、

右三人

今般諸職人并諸商売物直段方支配被仰付、追々遂吟
味可申付候間、直段不正之儀無之様町方江可被申付
候事

九月十七日

三三 洪水被害甚大を氣遣う藩主直書

(嘉永三年十月四日)

此度之出水不容易大變ニ而心魂を碎候而も致し方無之
実ニ当惑之至ニ候、近年打続キ候上当年者再度と申、
言語ニ可申出様無之艱難落涙候、我等不肖ニ而万事不
行届、先年ハ家中一統江懸難涉、朝暮致心配候処、不
幸ニ而各此度之大變我等不肖とハ乍申、斯迄請災難、
家来共ニ対し不便可申様無之、右ニ付我等身分是迄迎
も節儉相守り候得共、猶又此上深く相慎ミ、勸縮之存
込も有之候間、追々推察も可致、仍而何連も格別忠勤
致、勉勵候様ニと存候、且又海寇防禦之儀追々被仰出
も有之候処、減高後扶助減少之上、打続而之損毛、別
而手当も不行届、倍可致衰弊、何等之節覚悟も如何哉
と其段深致心痛候、最早省略之儀ハ手ヲ尽し、此上如
何共致し方無之、唯心之ゆるむと志まるとの二ツニ而、

少しハ省略之筋相立候事も可有之候と致觀念候、一統
是迄迎も心得違志有之ま敷候得共、我等心底相察し、
文武兩道無怠惰相勵ミ、銘々心ヲ締り致忠勤候様致し
度、別而江戸表之儀ハ万事雜費も多く、扶助少なニ候
而、日々之經營ニ相追れ、文武之道心外ニ空敷打過勝
ニも可相成哉と、其段者氣之毒ニ存候得共、心繰(カ)其意
候者心懸次第ニ可有之と存候、只々も我等心中推計り、
平常之嗜を以、何等之節不覚無之様致し度事ニ候、猶
追而申出へき事も可有之候得共、先ツ不取敢此段申聞
置候事

九月

三三 村替えの仰せを蒙る

(嘉永三年十二月二十六日)

左之通於御用部屋申渡之
被仰出マス、今般出格之以
御番頭格無役
早川庄兵衛
思召、以前之内村替被蒙

△

仰、御場所之儀ハ追而

御番頭格
杉原源太左衛門

御沙汰可有候由旨、被蒙

中小姓頭

仰、難有大慶被思召マス、

御用人

此旨申聞可有ヤウ被仰付越マス、
同格之面々

筆頭ヲ御請御祝儀申上、已上、
メ

三四 村替えにつき、藩主并真田侯直書

(嘉永四年正月六日発の便
同月十九日の項に記載)

正月五日
一左之通於御前御書付を以被仰付、御直書左之通

堀 新九郎

此度不存寄領分之内村替被仰付難有存候、就而は其

方儀、数年格外尽忠誠粉骨相勤、其上此度之儀ニ付

而は他人不存辛苦艱難共凌、今般之次第ニ相成候条

当家中興之忠臣と存候、仍而出格之存寄ニ而家格仙

(旧名内蔵介)
石織人同様申付、地鎗差免、以後代々諱一字差遣候、

猶忠勤相励、国政之儀無遠慮可申聞候、加増之儀は

追而可及沙汰候、以上

正月五日

同日
一於寄附之間差役人ツ、罷出、堀新九郎ニ御書付を

以被仰付候趣ニ付、以来礼儀正敷得差図候様被仰出

マス、於同所、真田様御直書拜見被仰付左之通、

真田様(幸恵)御進候御書

此度御領内村替被仰出候、段々御心配故と一段随分

之事ニ御座候、右村替は御加増同様之儀ニ而、不容

易事、立花別家主膳正奥州江所替以来領地荒蕪多く

(奥州下手渡藩一万石立花種温)
難渋ニ付、自家は勿論本家も段々相願、四拾弍年

目とかニ而御同様此程村替被仰出候事之由、然ルを

貴家ニ而は乍失礼御減高以来又々再度之惑乱相成、

讒か五・六年未だ全く居り合候と申ニ而も無御座候

処云ニ被仰出は、実ニ厚キ御恩恵と深く御肝鉄被成

候は勿論之儀ニ候得共、御家中末々等之内ニは左程

之儀ニも不相心得、御内領中は迎も出来は有之間敷

事之様ニ存居り、此度ニ至り候而は、村替位之儀と

格別之事ニ茂無之様ニ存候者も自然可有之哉、若右

等之儀此上老人たり共有之候而は不相濟儀ニ付、心得違無之様ニ御教諭專一ニ御政事筋御取扱被成候様ニと、呉々も柳席江御加増筋と申事は絶而無之事之様ニ承り及申候、右等は御承知ニは可有之也とも為念内々申出候、

但、此儀御家中江御示候而も不苦候、此段も御含迄申出候也、

殿様御直書左之通

此度之儀其方共も嘸々難有可存候、就而は君恩之儀感赦^(謝)致候而、万一之節は主従共ニ粉骨忠誠可尽候段、子々孫々迄可申伝候、依は右様之所存ハ毛頭有之間敷候得共、^(真田幸貫)信州殿厚思召之儀奉承伏候而、末々迄も具ニ可申聞候、以上

三 聖 村替令達書 (嘉永四年十二月八日発の便) 同月十九日の項に記載

仙石讚岐守

其方領分之内村替之儀先達而被仰出候ニ付、但馬国養

父郡之内高五千百六拾八石余上知被仰付、右為代知同国養父郡・気多郡・美含郡之内込高七千六百九拾石余被下之、委細之儀ハ御勘定奉行可被申談候、

三 聖 村替え明細 (嘉永四年十二月二十二日)

但馬国養父郡(村高は省略)

宮垣村 樽見村 中村 夏梅村

同国気多郡 (同前)

江原村 ^(惣)弥布村 石立村 国分寺村 宵田村

右ハ此度仙石讚岐守領分但馬国養父郡之内、高五千百六拾八石余村替上知被仰付、右為代知込高共七千六百九拾石余之内、書面之村々被下候間、従当亥年物成郷村小物成等可被相渡候、以上

嘉永四亥年十二月

無出座

五味与三郎

大森善次郎[㊤]

河嶋才右衛門[㊤]

岡田利喜次郎[㊤]

望月新八郎殿

竹内清太郎[㊦]

小高登一郎[㊦]

嘉永四亥年十二月

(役人名は同前につき省略)

増田作左衛門殿

但馬国美含郡(村高は省略)

但馬国養父郡

相谷村 浜安木村 奥安木村 訓谷村 無南垣村

養父市場村 門前村 葭崎村 小城村 上野村

丹生沖浦村 丹生浦上村 丹生上ヶ村 丹生地村

上ヶ村 広谷村 浅野村 朝倉村 高柳村

九斗村 米地村 境村 竹野村 浜須井村

国木村 小山村 舞狂村 上小田村 下小田村

奥須井村 下岡村 上岡村 隼人村 轟村

坂本村 浅倉村 赤崎村 浅間村 室尾村

小丸村 芦谷村 鬼神谷村 須谷村 円通寺村

高生田村 和田村 市場村

草飼村 切浜村 阿金谷村 羽入村 川田村

高合五千百六拾八石八斗四合

松本村 宇日村 田久日村 下塚村 大谷村

右ハ此度仙石讃岐守領分之内、村替上知被仰付候書面

金原村 林村の内

之村々、其方御代官所ニ相成候間、得共意同人家来罷

高合 五千八百四拾三石四升三合四勺五才

立、従当亥年物成郷村小物成等受取之、御仕置可被

外 田二反七畝歩

見取場

嘉永四亥年十二月

已上

右ハ此度仙石讃岐守領分但馬国養父郡之内、高五千百

六拾八石余村替上知被仰付、右為代知込高共七千六百

九拾石余之内へ書面之村々被下候間、従当亥年物成郷

村見取場小物成等可被相渡候、

(十四名連記の役人氏名は略す
但し、初めの六名は前記文書と同一)

望月新八郎殿

三七 一律増石と風紀高揚を促す藩主直書

(嘉永五年正月二十五日)

我等事、去ル天保六未年蒙嚴譴、減高被仰付、幼年中之事ニハ候得共追々年長別而殘懷骨髓ニ徹し、年来心勞罷在候処、今般不存寄領分之内、以思召村替被仰付込高迄被成下、厚蒙御仁惠候段、奉対^(仙石秀久)円覚院様始御代々様御孝道ニも相成、重疊冥加至極難有儀ニ存候、依之其方共儀も数年為致困窮候ニ付、宛行相増差遣度候得共、積年之難波ニ付、不行届候得共此度扶助致転法^(嘉永五年)来子年收納之上、年々豊凶ニ寄相増可差遣候、此上共遂節儉取統候様致度存候、且又右ニ付申聞置候ハ、我等幼年ノ此節ニ至迄、其方共之艱苦何卒相救申度と、程々致心痛、何事も穩便用捨之心得ヲ以、心底ニ応セざる儀も有之候而心外之儀も候得共、時節を相待、深相忍罷在候処、年増人氣も不宜、上下之差別も薄く相成、種々之雜説等申唱候向も有之哉、政事向之儀は猶

更我等致心痛、開運之上ハ一統も少々は安心為致度存込候より自然ゆるかセニ打過候処、中ニは追々心得違之者も有之耶、我等身不肖ニ而、難波さへ不為致候ハ、斯迄之弊風ニは陥入申間敷と、朝暮落涙ニおよひ候、尤政事向之不行届を嘆息致し候は仕官之常ニも候得共、潜ニ致誹謗候者仕官之常とハ難申、片腹痛キ事ニ候、其段ハ兼々乍心得無余儀此節迄致勘忍居候、今般前条之趣改而申聞候上ハ追々嚴重之取計も可致間、傍輩共打寄候節、浮説ケ間敷儀毛頭不申唱、申迄も無之候得共当家大切と存候ハ、忠孝之ニツ専ら吟味致し、弊風ヲ引起し、文武両道之実義^(儀)而已厚遂穿鑿可申候、殊更年若之面々夜話と号し、無益之参会は急度相嗜可申候、右之通申聞候得共、是迄承り候事共ハ承流しニ致し可申旨、何連も致安心、以後之処心得違なく文武忠孝相励、我等之寸忠相顯し、報御高恩候様心懸候ハ、可為本懷候、

但

3 多田弥太郎上訴事件と文久の政変

(1) 一律増石表

知行		無足	
当時禄高	変更禄高	当時禄高	変更禄高
石 600	石 800	俵 人扶持 51. 4	俵 人扶持 59. 5
550	740	43. 5	50. 6
500	680	45. 4	51. 5
450	620	47. 3	52. 4
400	560	37. 5	42. 6
350	500	40. 4	44. 5
300	430	39. 4	43. 5
250	360	41. 3	44. 4
200	290	32. 4	35. 5
150	220	34. 3	35. 4
135	200	32. 3	33. 4
125	185	35. 2	36. 3
115	170	25. 4	26. 5
110	160	30. 3	30. 4
100	150	27. 3	26. 4
98	140	28. 2	27. 3
96	135	大 扶 持	
94	130	大 扶 持	
92	120	当時禄高	変更禄高
89	115	人 扶持 15.	人 扶持 17. 半
85	110	13. 半	16.
82	100	12. 半	14.
77	95	12.	13.
72	85	10. 半	12.
67	80	10.	11.
62	70	8.	9.
58	65	7.	7. 半
55	60	6.	6. 半
50	55	4.	4. 半
		3.	4. 半

二 御用部屋日記

(2)

小 切 米		御 役 高	
当時禄高	変更禄高	石	
石 斗 人扶持	石 斗 人扶持	300	御年寄
14. 8. 2	15. 2. 3	280	(御城代 御中老 御番頭
14. 2. 2	14. 3. 3	220	(御小姓頭 御用人
13. 7. 2	13. 8. 3	200	御側御用人
13. 4. 2	13. 4. 3	150	御旗奉行
12. 7. 3	11. 2. 4	130	(御弓鉄砲頭 御郡奉行 御留守居
12. 7. 2	12. 6. 3	100	(町奉行 御勘定奉行 御長柄奉行
10. 8. 3	10. 6. 4	90	(奥御附 御側頭取
12. 0. 2	11. 7. 3	80	知行取 御側向
11. 2. 2	10. 8. 3	51俵 5 人扶持	無 足 御側向
9. 3. 3	8. 8. 4	43俵 5 人扶持	御代官
10. 5. 2	9. 9. 3		
10. 2. 2	9. 6. 3		
9. 8. 2	11. 0. 2		
9. 7. 2	9. 0. 3		
8. 9. 2	8. 1. 3		
8. 3. 2	9. 2. 2		
8. 1. 2	7. 2. 3		
7. 5. 2	8. 3. 2		
7. 3. 2	6. 3. 3		
6. 7. 2	7. 3. 2		
5. 8. 2	6. 4. 2		
5. 0. 2	5. 5. 2		
4. 0. 2	4. 5. 2		
俵 斗	俵 斗 人扶持		
16. 0. 2	19. 1. 2		
9. 0. 3	12. 0. 3		
8. 2. 3	11. 2. 3		
7. 0. 3	9. 3. 3		
5. 2. 2	8. 1. 2		
9. 0. 2	11. 1. 2		
8. 2. 2	10. 3. 2		
7. 3. 3	10. 3. 3		
金 1 兩 3 步 3 人扶持	2 兩 2 朱 3 人扶持		
7 俵 3 斗 2 人扶持	10 俵 2 人扶持		

乍序申聞候、文武両道之儀ハ貴賤高下ニ拘らず武家之嗜ニ候得とも、年来勝手向不如意ニ付手充も不行届、且面々難渋ニ依而自然と相怠、心懸薄キもの間々有之様子苦々敷事ニ候、聊ニ而も充行差遣候ハ文武相嗜、深研究致させ候事、主人たるものゝ所存ニ候、又聊ニ而も禄ヲ受候もの文武相応ニ相嗜、厚遂穿鑿候ハ臣下之心得ニ可有之候、然ル所常々難渋を申立、厄介筋ニ相成候上、文武も不相心懸、行動をも不相慎候ものハ、臣下之道ニ相外れ可申候、尤壯年之面々ハ勿論之事ニ候得共、假令年寄候とも在勤罷在候ものハ、折々稽古場へ罷出、自身之稽古ハ致さずとも、年若之ものとも取立世話遣し候ハ、殊勝之事ニ候、乍去、病身或ハ老衰之もの一概ニも難申候間、随分遂保養、息災ニ而年久敷奉公致し候ハ、祝着之事ニ候と別件申聞候、是迄之心得違に本文之訳柄ヲ以可及用捨候間、此度急度相改、格別文武相嗜候様致し度候、心懸之精粗ニ寄、近々裏貶之取斗

も可致候、其段兼而相心得可取上、(嘉永六年)丑年帰城之上可

及吟味候、且又右申聞候事とも我等心得違と存候ものは、不差控、其段可申出候、勿論文武ニ相達し候とも行動不宜候而ハ更ニ其甲斐無之候間、其段も可及吟味候、申迄ハ無之候得共、傍輩とも相互ニ異見申聞、俱ニ遂穿鑿可申候、右之趣子弟之面々ハ父兄ヲ得斗可申聞候、

今日被仰出候高増帳左之通、(頁二二〇 一律増石表)

三六 本年より献上品は山椒から干物背に替える

(嘉永五年九月五日)

御献上之山椒、当年ヲ相替り干物背御献上ニ相成、御用意出来ニ付、大書院江飾置、御年寄共御書院一之間壁際江着座、御用人同所御椽頬ニ着座、御勘定奉行・御賄役同所本之方御附書院際江罷出居、同席共列座之上、御献上之物背箱蓋取之、何連も御上段江罷出、遂一覽、畢而始メ列座之席江再列座、御用番ヲ御勘定奉

行へ猶又入念候様申述候、

三〇 牛博勞鑑札交付願に許可

(嘉永六年正月二十五日)

河原町

牛博勞受并元メ共

牛寄売買之儀、先年〆□蒙御赦免難有仕合奉存候、然ル処去秋紀州表〆博勞方兩三人罷越、牛売買相続方之儀段々応対仕候処、元来□国之牛ハ和泉・河内・紀州辺ニハ至而向宜趣、尚又当年〆□□□ニ付、取合として博勞共へ鑑札頂戴之儀相願□冥加聊上納金ニも仕度趣相願候由、故障も無之候へ、勝手ニ可申付旨申談、

三一 陶器職人、作料引き上げを求めて

休業するを叱る (嘉永六年四月十五日)

焼物之儀は国産之儀ニ付、追々盛山為致度御趣意ニ而厚く御世話有之候処、近来職人共心得違風儀不宜、作料等之儀ニ而中には親方共江申分ニ而職方相休、右等

〆自然焼出しも少く、代呂物も高価ニ相成候哉ニ相聞、右ニテハ永久繁昌之基ひにも不相成候間、職人共ニ於てハ親方之為メ筋を心懸候へハ、其方之為メニも相成候間、急度相心得可申候、親方共〆も職人共取扱方之儀ニ付不筋之儀有之候而ハ不相成候間、此段精々相心得可申、此上職人共不都束之儀も有之候ハ、人別相糺し急度手当可申付、親方迎も同様之事ニ候間、御趣意之処厚く相心得、成丈下直ニ致し、追々盛山致し、手広ニ売捌ぎ、正路之渡世いたし候様相心懸可申事

三一 西洋流大砲製造着手命令 (嘉永六年六月二十七日)

西洋流大筒
ホウイッスル

太田彦太夫

竹村次郎右衛門

右今般御製造被仰付候間、取調懸り迄伺事、請取物等之儀は左之面々江可申達事

乗竹 彌

田中伊兵衛
鳥居五兵衛

右ニ付、懸り被仰付候間、同事并ニ渡し物等之儀、取
斗可申事

三三 綱紀肅正を促す藩主の直書

(嘉永六年八月二十日)

今日被仰出御直書左之通

今般従公儀被仰出候質素節儉之義^(儀)ニ付、此度改而申
出候得共、過去先事ヲ察度ケ間敷申候筋ニハ無之、
乍去夫ヲ不申候而ハ永久之締リニ不相成候間、不得
止事申聞候、我等之心得は是迄之弊風一洗致し、追
年永統之事而已本意ニ候間、其心得ニ而熟談致し、
我等心中推察致し候様ニと存候、

一前々箇条ヲ以儉約筋嚴重ニ申付候得共、兎角旧染之
余風ニ而手戻リニ相成候段、深く残愧之至ニ候、度
々々条ヲ立候は、年寄中始一統等閑ニ相心得候歟、

又ハ節儉筋之事銘々身分之為とハ不存、御夫等々手
ヲ經ずして相崩れ候事存候、一度申出し嚴重ニ相守
り候ハ、數度ケ条ヲ立申出し候ニハ不及事ニ候、帰
城後申渡し候通、追々下墨之上急度可申付含ニ有之
候処、此節之模様ニ而ハ追々我等之趣意相守り候様
子故、少しハ致安心候間、先ツ不及其沙汰候、今般之
被仰出ニハ、於公辺も御深慮有之儀と恐察仕候得ハ、
我等近年迄為差御用も不相勤候処、卯年一件後間も
なく席並之御役も被仰付、其後寸功も無之処、思召
を以不存寄村替被仰付、年来之耻辱聊相雪キ愁眉ヲ
開キ候段、莫大之御仁恵冥加至極、難有事ニ候、先
般江戸近海へ異国船渡來ニ付、防禦等被仰付候向も
有之、猶追々嚴重之御備も可被仰付候御模様、殊ニ
御膝元と申一入恐入候事ニ候、外寇之儀ハ本朝万代
之患、武家ハ勿論、日本國中拳而人種之絶申迄も防
禦不致候而ハ不相濟事、我等事ハ前条申聞候通之次
第、從円覺院様當時ニ至ル迄數代之御厚恩一統相弁

へ候事被存候、此処ヲ勘へ候得へ此度杯第一番ニ防禦ヲも相願可申筋ニも可有之候哉と深く致心配候、異国船防禦之事ハ前々申付置候事故、此度ニ限り候訳ニハ無之、年来宛行少ナニて平日経営難渋之段ハ一応尤之様ニ相聞候得共、武備之嗜之理合ヲ押而相尋候は申訳難立向も可有之歟と苦々敷事ニ候、夫と申も旧染之余風ニて飲食之奢ヲ崩れ易く、去春申付候事共間もなく相崩れ、当年帰城前迄之様子一向論外之事と承り申候、平日難渋ニ暮し家族共衣食不足ニ候処、都而当主ハ飲食ニ流れ候向も有之哉、右等之次第ニ而武備之嗜ニ薄く候てハ、更ニ申訳相立申間敷候、且又右之中弊風にも不流、一己之見識相立候面々も有之由、尤之至、祝着之事ニ候、右申聞候通、品ニ寄防禦筋にて家来多分召連、何時參府出陣も難計、其節ニ至り兎^(ウ)之角之と申候連、致し方ハ無之候、且又一統年来之難渋ニ付、兼而申付置候通、着具得道具貸渡し可申候得共、品限りも有之事、借

り物ニて致出陣候てハ平日手馴れ候品ニも無之、且不外聞と申存之外不覚も有之間敷ニも無之候間、飲食等費ヲ省キ、何卒少シツ、ニテも修覆致し、其際ニ当り恥辱無之様心懸候ハ、祝着之事候、
 一 右達候飲食候事、只一通リニ心得候而ハ不相濟事と被存候、近來まで無益之出會、不相応之馳走ニ而酒宴ニ長し、如何敷事共有之趣相聞、是又苦々敷事ニ候、去春申付候書取之趣、得斗致熟読候様致し度候、
 一 振廻ケ間敷事一切無用之旨、毎度申出し候処、此一条人情ニ外れ候申付方ニ候得共、少しゆるめ候得ハ節ヲ失し、直様手戻り増長致し候風俗故敲敷申付候事ニ候、近來之風俗追々弊風ヲ建直し候哉ニも相聞、是又外寇渡來ニ付而ハ銘々武備之嗜ニも可心懸ニ付よもや手戻りも致す間敷、此度ヲ改メ而実義之所置ニ致し度存候、益もなき振廻と申ハ、誠ニ以費之事親類・朋友・同役杯折々出會致し、四方山之咄しニ而睦敷打寄、時刻ニ成候而麴酒・麴飯差出し、緩々物

語、内外打明し相互ニ助精ニ及び、睦ひ合候ハ人情之然ら志むる所ニて苦しからざる事ニ候、去ながら飲食之為ニ親類たり共打寄り候は、信義ニ外れ可申候、若し哉取求め候酒宴ニ而程々設ケ等致し候歟、又ハ遊興ケ間敷儀有之候而ハ申迄も無之候得共、信義ヲ失し候事故、我等ヘ対し候而ハ忠節筋トハ更ニ不被存候、

一 音信贈答之儀、別条ニ申出候通、人情ニ外れ候而ハ不相成儀ニ付、銘々之分限且又親類之親疎、朋友之交りも厚薄可有之候得共、我等江之忠節ヲ忘れ、過分之贈答致し候而ハ不相濟事と存候、可成丈ケ手輕ニ致し可申、態々取求メ候品にて致取遣候而ハ、前々も申如く信義ヲ失し、是又忠節之筋トハ不被存候、聊之品ニ而も実意さへこもり候得ハ人情ハ尽し可申候、

一 親類打寄之□銘々先祖江之孝道ニ候間、心得違申間敷候、如何様臙末之飲食ニ而も睦敷打寄候得ハ、

孝養ハ貫キ可申候、我等年々同姓相招キ候節之模様且又朋友出会之料理向、至而臙末之品ニて相仕廻、且又同席江被招罷越候節、手土産ヲ始、平常懇意之向ヘ贈答之事等、其筋より承ハらせ度事ニ候、

一 近來居宅格外持荒し候ものも有之候、是ハ難泐故之事ニハ可有之候得共、心懸之精疎も可有之事と存候、且又居宅ハ取飾候は論ずるニ足らず候、衣服之事も右ニ准し、銘々了簡も可有之事と存候、

一 儉約筋之事、度々ケ条ヲ以申出し候ハ前ニも申如く、直様相崩れ候故之事、心之ゆるむと志まるとの二ツと存候、申も如何ニ候得共、我等家督後ノ手元之儀、都而規定致し候事ハ何卒永久相貫キ申度、并好ミ之事等ハ別而相慎罷在候、此兩様ハ常々格別勉強致し度候間、若心付之者有之忠節致し呉候ハ、本懐之事ニ可存候、

一 右之趣巨細ニハ認置候得共、万端推而勘考致し、我等之趣意能々承知之上、向後ハ格別勉強致し、可成

丈遂節儉、質素ヲ專一ニ相心得、聊ニ而も武備之嗜
ミ專要之事ニ候、此度申出候趣意ニ戻り、万々一不
相用ものハ、以後不忠ものと可存候間、其段相弁相
勵ミ候ハ、祝着之事に候、

一 今般改而申出し候上ハ一統忘却も致間敷候得共、前
々も申如く、しまるとゆるむとの二ツニ候間、以来
同役・同席相組限り、毎月一度ニ寄合、此書面熟読
致し、少しニ而も心得違之もの有之候ハ、互ニ異
見ヲ加へ、我等之趣意致貫通候様可致候、尤毎月日
限相極置、目付役申達可置候、殊ニ寄り其席へ目付
役罷越候事も可有之候、尤部屋住之面々江ハ父兄
申伝へ、十五歳以上ハ常々之朋友人別ヲ組ミ、右同
様相心得可申候、人別之儀月役へ申達し可置候、尤
会宅差支候節ハ、勤仕・部屋住共弘道館ニて寄合可
申候、

但、寄合時刻当番ニ有之候へハ、罷越候内番引可申候事
一 右之通申出し候儀も、別ニ申聞候通り土風不衰様致

し度、別而異国船一条ニ付而ハ何時出陣も難斗、一
命貫ひ請候事も可有之、一統其覚悟申迄も無之候得
共、能々勘弁可致候、家来之恥辱ハ我等之恥辱、我
等之恥辱ハ家来之恥辱と存候、且又此度申出し候儀
ゆるかせニ心得候もの有之候ハ、年寄中評議之上
支配頭へも及示談、急度取計可申候、万一麤略之事
有之ニ於てハ、年寄中始支配頭目付役之可為越度候
間、嚴重之所置尤ニ候、以上

八月

添書

去ル子ノ正月差出候直書并其節年寄共ハ為差出候書
(嘉永五年)
面共ハ、本書之通、得斗相心得可申候事

三三 太田彦太夫門下、西洋流大砲試射

(嘉永六年十月四日)

一 兩流江御預ケ之西洋流御筒、砲発之儀来ル七日、於
二 本松致し候様御用人ヲ以申談

(嘉永六年十月七日)

一 九ツ式步御出宅、西洋流為御覽式本松江被遊御出、七ツ八步御帰被遊、御帰後伺御機嫌御小納戸江差出

(嘉永六年十月八日)

太田彦太夫

年来砲術修業出精致し、昨日西洋被遊御試候処、年来之規模も相顕、別而尤之儀ニ被思召候、依之御手自御二品物、御紋付・御上下拝領被仰付候、
一 左之通於御用部屋申渡之、

太田彦太夫

せかれ

鉄三郎

せかれ鉄三郎儀、砲術修業も相募、昨日西洋流御試被遊候処、無滞相濟尤之儀ニ被思召候、依之年頭・五節句・月次出仕被仰付候、并為御褒美御目録之通被成下候、此上猶更勉強致し候様、被仰出候事
但、御目録金五百疋被成下候事

横山昇介

せかれ
静太郎

せかれ静太郎儀、追々砲術修業も相募、昨日西洋流御試被遊候処、無滞相濟尤之儀ニ被思召候、依之年頭・五節句・月次出仕被仰付候処、先達而弘道館勤ニ而出仕可被仰付置候儀ニ付、此度不被及其沙汰、右同様相心得可申、并為御褒美御目録之通被成下候、此上猶更勉強致し候様被仰出候事

但、御目録金五百疋被成下候事

三三 西洋流鑄筒鑄立(嘉永六年十月二十二日)

一 兼而被仰付置候西洋流鑄筒、昨日無程鑄立候段、懸り御用人乗竹弼申達候ニ付、其段違御聰、

三五 荒木帯刀(玄蕃)、謹慎申し付けられる

(嘉永六年十一月五日)

荒木頼母

親類江

頼母祖父(旧名玄番)帶刀江被仰出候、荒木家之儀は格別之御家柄
 二付、(弘化二年九月)先年信太郎死去之節も別段之御取扱を以養子被
 仰付、跡目無相違被成下、猶又当時頼母儀□□問も無
 之処、家筋之儀ニ付厚以思召御加恩被成下候程之御取
 斗被為在候処、帶刀儀(天保七、九年)先年再勤在役中、如何敷儀有之、
 其後去ル(天保十四年)卯年江戸表江被為召、御書取を以被仰付候儀
 共、如何敷儀 此節ニ至り候而も兎角不埒之儀共相
 聞、不都束之事ニ被思召候、右ニ付ては頼母(勤九)前ニも
 相拘り、同人江御沙汰も可有之処、右之訳柄ニ付此度
 は格別之以御含不被及其御沙汰候間、荒木家興廢之場
 合と相心得、帶刀儀ハ身分相嗜、急度謹慎罷在可申候、
 親類之もの共儀、余儀なき用弁ハ格別、先ツハ面会も
 仕間敷、出入之ものハ懇意之ものたり共決而面会不仕
 候様被仰付候、追々不都束之儀も相聞可申哉、其節は
 乍御心外嚴重之被仰付も可有之、且又中川修理大夫様
 ・九鬼式部少輔様・阿部能登守様江被為対候而も御迷
 惑ニ茂被思召候間、卯年被仰付置候儀共忘却不仕候様

被仰付候間、此旨嚴重ニ可被申聞旨被仰出候、

十一月五日

荒木頼母

親類江

荒木家之儀は格別之儀ニ付、別段之御取斗(前以下同)茂有之事ニ
 候間、親類ニ而茂其段相心得、頼母江厚及助精可申候、
 帶刀儀追々不埒之儀共相聞候節ハ無余儀其御取斗茂可
 有之、左ニ而ハ折角之御趣意茂相貫キ不申、御心外之
 儀ニ候間、能々示談致し、帶刀・頼母へ茂無遠慮心添
 可致、尤荒木家興廢之場合ニ候間、此段厚相心得候様
 被仰出候、

但、帶刀江被仰付之趣、頼母江も可被申聞旨、被仰出候、

十一月五日

三五 日本海岸防禦陣備立心得のこと

(嘉永六年十二月朔日)

今日被仰出書左之通

一 浦手御手組陣押備立、来春可被遊御覽候間、相心得可申候、

一 当時浦手御手組江罷出候面々ニ不相限、其節惣御家中一同罷出可申候、

一 其節之着用もの甲冑不相用、銘々弁利之着服ニて何時も着具相成候様、尤陣羽織・小袴・立付之内勝手次第着用可致候、

但、利方ニさへ相成候へ、如何体之品ニ而も銘々了簡次第、尤鬮末之品たり共不苦候、

一 右着用物等之儀は平日相嗜居可申筈ニ候得共、若哉不都合ニも候へ、少分之拝借可被仰付候、

但、拝借上納之儀ハ御勘定奉行へ承り合可申候、

一 部屋住二男・三男ニ至迄、十五歳以上之面々其節罷出可申候、尤御宛行無之面々江少分之御手宛可被成下候、

但、前髪有之面々ハ着服勝手次第之事

一 異国船渡来之節ハ兼而被仰出候通、着具□□□□不行

届面々江ハ□□成候得共、当時之模様ニ而は

甲冑ニ而急度利用と申様子ニも無之由被遊御承知候、銘々存寄も可有之候得共、甲冑不相用□□^{方カ}可然様心得候面々は、勝手次第可為候、乍去甲冑ハ武道之嗜、

最第一之品ニ候間、早々其場所江ハ可被差遣候得共、急場之事故人足等間ニ合不申ハ必然之事、人足ニ事を欠キ勝利之隔合を抜候而は不本意之儀、且又人足多く召連候得は自然足手纏ひと相成、防禦之妨ニ候間、海辺ヲ注進次第右之着用物ニて戦士之面々ハ勿論、其外共老入立ニ而得道具を持、一足も早く馳付可申、着具不致候而も手合セ之合戦相成候様相心懸可申候、

一 当時異国人甲冑は不相用候由、一統承知之事ニは候得共、為心得申聞候様被仰出候、

一 諸侯方之内ニ茂異船防禦ニ限り甲冑不相用御□□^{家カ}も問々有之由、此旨も申聞置候様被仰出候、

一 殿様御出陣有□□先ツ御甲冑□□召候思

召ニ候、

一 試之ため不時ニ御人数惣寄セ可有之候間、其節は相

図次第表御門前ニ馳付、銘々名札懸可申候、

但、相図之儀は追て被仰出候、

一 小役人以下立付股引勝手次第之事

但、羽織所持無之面々ハ、胸当ニ而罷出可申候、

一 御徒士股引之事

但、羽織御貸渡之事

一 小頭以下股引・法皮之事

但、御手組之者江は法皮御貸渡有之候得共、其余は股引

計り之事

右之趣は全く臨機応変之事、甲冑不相用と申儀ニ相沈

ミ申間敷、此上猶更修覆等入念厚く相心懸、嗜置候様

被仰出候、

丑十二月朔日

三七 堀新九郎隠居、息子鯉助年寄就任

(嘉永六年十二月朔日)

御書取左之通

堀 新九郎

御自分儀年来精勤被致、是迄も申間候通忠誠之程令

満足候、然ル処先達而ハ内願之趣無余儀事ニ付、願

之通隠居申付候、乍併此上家政向并勝手方之事共万

端被相心得、折々出仕、側部屋江相詰、我等手元江

ハ勿論用向次第用部屋其外役所江も罷出、年寄中ニ

申合、聊無遠慮示談可被致候、且又折々江戸表江も

召連可申候間、其段被相心得罷在可被申候、家

督之儀ハ悴鯉助候間、其元跡役無間欠政事向

万端精勤可致、厚可申論候、依之刀一腰差遣候事

但、座席之儀ハ年寄次ニ相心得可申事

堀 鯉助

其方父新九郎儀、内願之通隠居申付候、同人儀年来

骨折精勤致し、其方儀茂常々出精被相勤、尤之儀ニ
 存候、依之家督無相違五百石差遣、加判之列座順仙
 石織人次并先達而新九郎江申付候通家格申付候、此
 上万端入念格別被致精勤、尤先達而家(格力)申付候上は
 其心得茂可有之候得共、万事□□勉強被致、我等江
 も無差控、心付申聞候事

* 堀新九郎は嘉永六年十二月四日より笑山と号する。

堀鯉助は嘉永七年十二月五日に新九郎と改名するを
 許される。

三六 陣押足並揃につき、家中へ達し

(嘉永七年正月十五日)

陣押足並揃当春可被遊御覽候処、御人数配り御模様替
 り之御含茂有之候間、追而可被仰出候、尤人数揃之儀
 は来ル二月始ニ可被仰出、其節は丁々鳴子ニ而相触可
 申候間、聞付次第早速表御門前江馳付、銘々名札掛ケ
 可申候、尤兼役有之面々は主役之処江名札掛可申候、

但、名札は其以前ニ相渡可申事

一 着用物之儀は兼而被仰出候着服ニ而罷出可申事
 一人数揃丈ケ之事ニ候間、得道具持参ニ不及候、尤陣
 押足並揃之節ハ得道具持参之事、且又召仕居候下人
 ハ格別火急之儀ニ付、不都合之儀も可有之間、仮令
 御役人たり共無僕ニ而罷出不苦候、

三五 村割(地方知行)復活(嘉永七年正月二十日)

一去(嘉永五年) 正月廿五日御村替ニ付、出石表并同年三月朔
 日江戸表ニ於て御転法被仰出、御家中御宛行御增高
 被成下候付、寛政十一年二月被仰出候村割場所ニ被
 差戻候付、此度鬪頂戴被仰付候事

一 明廿一日村割鬪頂戴可被仰付哉相同候処、伺之通被
 仰出、

一 左之通御目付江申談、

表

早川庄兵衛	土岐求見
杉原源太左衛門	岡木極人
乗竹 弼	西山平左衛門
堀 丹宮	太田彦太夫

去々子正月

御軼法ニ付

村割場所鬮頂戴

被仰付候間、

明廿一日四時

麻上下着用

出仕候様、

但、病気差合等ニ

而出仕無之面

々ハ罷出候向

分名代兼不苦

候、

式

伴 四郎左衛門 松井重太夫
 波多勘左衛門 仙石晃之允
 鷺見久左衛門 岡部鉄五郎
 竹村次郎左衛門 中村喜左衛門
 西山善右衛門 植松左太夫
 岡嶋衛守 竹村猛吉
 谷野忠太夫 岩 市左衛門
 弓削十太夫 倉品斐夫
 磯野源五右衛門 井上伊三太
 稲垣広門

三

太田市右衛門 金沢多之助
 長岡鉄五郎 井上長兵衛
 荒木助左衛門 佐久間庄太郎
 小倉三弥 服部拾五郎
 拓植九郎右衛門 渡辺啓次郎
 堀 敬之助 桜井宣藏
 一柳弥五作

四

浅村安太夫 藤岡喜平
 堀 半兵衛 小川多久馬
 河野勇助 神谷武次郎
 中西直之進 麻見紹太郎

右同断之
 処、親類
 内扨人ツ
 、為名代
 右同断

但、親類
 無之面ハ
 名代兼不
 苦候、

加藤四郎兵衛
 依田市右衛門
 佐治八郎右衛門
 西村 勇
 河野市郎左衛門
 真田 束
 清水孫之進

右同断ニ付
 出仕可申談
 処、以前村割
 場所其儘被
 差置候付、出
 仕不申談候事

河合寛吾
 二宮一郎
 服部権記
 岡木武記
 小出平太夫
 本間虎五郎
 高山犀助
 吉野忠藏

右同断ニ付親類名代差出ニ不及、
 尤親類内江右之趣可被申置事

村割鬮頂戴次第左之通

(嘉永七年正月二十一日)

一 大書院扨之間御上段下南之方江御郡奉行・元方御勤
 定奉行・御目付・御郡目付扨人ツ、出席、少し隔二
 之間御敷居際ニ免定頭不残、平勘定式人御帳面控罷
 在候事
 一 同所南之方御廊下江地方役扨人御代官共罷在候事
 但、懸リ合御役人共麻上下着用之事

一同所老之間御座敷ニ御年寄着座之事

一同所右着座之後口通りよ里二之間御椽椽敷居ニ掛ケ

御番頭格并御小姓頭・御用人・御側御用人着座之事

一同所二之間ニ御弓鉄砲頭ヲ組付迄持席ニ而一同着座

罷在候事

但、是迄村割頂戴之御側勤之面々ハ同所三之間江可罷在候、

一 御上段御三方ニ村割場所書付載之、御上段ニ御三方

三飾居置之、

老番

海辺村々

貳番

揚ケ場村々

三番

里方村々

但、南之方ヲ一番ニ立

一 仙石織人御上段江罷出、御三方村割書付一封塗台ニ

載セ、御側御用人江渡之、掛り之御役人出席之前江

持參之帳面ニ認相濟、御側御用人御床ニ居置候事

一 御年寄ヲ組付迄持席ニ而順々老人ツ、御上段際江罷

出、右三飾之御三方御上段端へ居有之村割書付一封

ツ、頂戴之、江戸詰并定府且又隠居之面々は名代を

以当人之席順ニ頂戴之、御年寄ヲ御番頭格迄ハ披封

之上御用人江相渡、同人ヲ免定頭江相渡、御用人以

下ハ免定頭江差出、懸り御役人取斗候事

但、御年寄共頂戴相濟御用番居残り外退座之事

一 隠居ハ名代ニ候得共、堀笑山ハ当人罷出候ニ付、御年

一 五百石以上は老番之御三方村割書付一封、貳番之御

三方村割書付一封、三番之御三方村割書付二封、都

合四封頂戴之事

一 五百石以下百石迄、御三方三飾共各一封ツ、三封頂

戴、百石以下ハ二封頂戴之事

一 村割書付頂戴之上、其場所本高ニ不足之節は其場之

書付猶又頂戴之事

一 御足高有之面々は本高之処を以村割書付頂戴之、御

足高之分、其場所ニ於て可相付処、其場所不足之節

は其場之書付猶又頂戴之事

一 右不残頂戴相濟候段御目付申達之上退座之事

一 御年寄共村割場所御書付頂戴之御礼御側御用人を以

申上候事

一 御番頭格并御用人共御用部屋江罷出、村割場所御書

付頂戴之御礼申達同断、

一 御年寄御用人以上之江戸留守并引込等ニ而名代切

々御用部屋江罷出右同断

但、御用人以下之名代は一列の方へ罷出候事

一 御弓鉄砲頭始御役人一統外様御備御小姓迄、村割場

所御書付頂戴之面々、大書院三之間江一同置居御礼

申達右同断、

但、御側御用人支配方有之ニ出席、并御小姓頭も幼年之

面有之ニ付、出席之事

三〇〇 陣押足並揃の節要綱 (嘉永七年正月二十三日)

一 左之通海防懸江申談書取を伴四郎左衛門江相渡

陣押足並揃且人数揃之節

一 三代御侍分ニ御取立無之子弟は小役人勤江被仰付

候事

但、一代ニ而茂御馬廻リ被仰付候家筋は格別之事

一 三代以上小役人之子弟は嫡子斗り罷出可申、二男・

三男等は文武心懸之精疎ニ寄り人別御撰之上被仰

付候事

但、立付股引勝手次第、尤陣羽織御貸渡之事

一 小頭以下刀差之者共江股引御貸渡之旨申談置候処、

御詮儀^(議)之上陣羽織斗御貸渡之事

一 左之通り懸り御目付江申談、御用人江申談

一人数揃之節左之場所ニ於て太鼓打候ハ、聞付次

第表御門前江馳付可申事

但、鳴子は別段相廻り候事

内町 昌念寺 智明院谷 大橋 馬場上

一 右同断之節手入ニ而鎗為持候儀は銘々可為勝手次

第之事

右之通相心得向々江可被申談候

正月廿三日

一

人数揃足並揃之節、町人共戸外致し又ハ辻々等ニ佇見物致し候儀堅差留可申、尤無礼等無之様締り筋之儀は町役共江嚴重可被申付候、

町奉行江

遊軍

城坂下江

右之場所江相集り下知次第可為行軍事

一出陣先手配り

老ノ手

丹生浦

式ノ手

竹野浜

三ノ手并遊軍

須谷
円通寺

三二 海岸防禦出動並に留守組警衛態勢要綱

(嘉永七年正月二十八日)

今般趣意有之海防手組改革致し、出陣留守中、国等万

端手配申付候、右ニ付而ハ此上別而相励可致勉強候、

一面々得道具も可有之候得共、趣意有之、戦士は勿論

備頭ハ末々迄鉄砲可相用事

但、問合之合戦ニ押移候ハ、面々之可為覚悟候、

一異国船渡来候ハ、太鼓櫓ニ於て寄セ太鼓打、昌念寺

ニ於て三ツ続ケ早鐘撞可申間、聞付次第

老ノ手 表門前々追手内江

式ノ手 作事門々西門内江

三ノ手 玄関前々大書院広庭江

一甲冑着用候得は兼而定置候指物相用可申、着具無之節者袖印可相用事

但、□□陣羽織之面々袖印ニ不及候事

一老ノ手番頭・二ノ手備頭・三ノ手武者奉行・遊軍番頭は馬印可為持事

一手組外之面々出陣留守中別而大切之儀ニ付、面々詰

所江相詰非常之警衛肝要ニ候間、気たるミ無之、馬

前之働同様相心得可申、且又何時出陣申付候共急速

罷出之為メ出陣同様之着用物ニ而可致出役候事

一兼而申出置候供連減少之儀、年寄共よ里可申渡候、

但、勝利之上目出度凱陣之節ハ兼而定之通召連可申事

右之通申付候間、其旨相心得、自然戦争ニ及び候ハ、
二念なく抽粉骨可申、其品ニ寄り褒貶之可致沙汰事

寅正月

御書付

今般被仰出候趣ニ付而は、御家中之面々子弟ニ至迄
砲術稽古格別ニ相励可申候、且又小役人以下末々迄
も砲術稽古被仰付候間、一統厚く相心得可致修業事
但、小役人以下江は当分之處玉葉御渡し可有之候、

三三 着到試実施 (嘉永七年二月八日)

八ツ時過兼而被仰出有之候五ヶ所ニ而大鼓^(太鼓)打出し、町
々鳴子唱候付御家中一同末々ニ至迄、兼而被仰出候着
服ニ而着到試として早々馳付、銘々名札相懸各御役名
立札之場江立並罷在、其中表御門開ケ 殿様御出陣之
御装束被遊、御側向一同御供之面々平日之通ニ而表御
門中程ニ出御、御床机江御腰懸被遊、堀笑山法体ニ而
御床机元江罷在、御側御用人を以御年寄共被為召御意

有之、畢而御番頭早川庄兵衛被為召御意有之、引退而
次ニ御小姓頭御用人同格之面々被為召右同断、御年寄
共堀笑山床机ニ懸り候様御側御用人を以被仰出、一同
踞ひ居候処、いつ連も相立候様御目付を以被仰出、其
中御側向御供之面々堀笑山御召連ニ而着到試し御巡覽
有之、元之處江御床机御据被遊、暫して御側御用人土
岐求見御直書と相喚きて何連も平伏仕罷在、求見御直
書披き読之、

何連茂時刻を不移罷出神妙之事ニ候、先比申付候
通此上万端格別相心懸候様存候、今日は始而之儀
ニ付、赤飯差遣候間、寛々相祝ひ可申事

三三 渡辺要人、出石へ送還 (嘉永七年二月九日)

正月廿三日
一右之通被仰付旨申渡候処御請御札申達候、

御目録
金五百疋

河嶋武左衛門

今般渡辺要人從阿部能登守様御引渡ニ付、出石表へ
被差遣親類共江御預ケ被仰付、依之道中警固被仰付

右之通被成下候事

三四 渡辺要人、出石到着後の処置について

(嘉永七年二月十日)

渡辺要人

右此度阿部播磨守様御引渡有之、此表へ御差戻候付、親類江御預ケ被仰付候間其旨親類江可被申談候、一右ニ付同人着之節親類兩人鱒山辺へ罷出、江戸表へ附添之河嶋武左衛門御受取之、親類同道ニテ困有之場所へ着致し、直ニ困ニ入可申事

但、兩人大小始所持之品是又親類江受取可申候へ共、親類江御引渡之上ハ以後都而親類御任せニ相成候間、要人并御メリ筋等之儀、急度可申談候、
一 困入江封印等も都而親類ニテ取斗可申事

一 要人着之節、為立会御徒土目付老人、下目付御郡組老人ツ、鱒山辺へ罷出、見届之上引取可申事

三五 行軍試し実施要領 (嘉永七年二月十一日)

一 左之通海防懸御目付江申談

行軍試之節

一 老番貝追手御櫓台ニ而寄セ貝吹可申事

但、三ノ手御徒士之内ニ而相撰兩人ニ而吹可申事

一 式番貝・三番貝、御旗本ニ而吹之、夫ノ諸手請継

可申事

一 左之通向々江申談候様懸御目付江申談

海防御手組江手筒持参之面々江は船筒薬拜借被仰

付候間、明十二日御櫓方江罷出請取可申事

一 左之通御目付触差出ス

二月十四日行軍試之節

一 老之手

一 二之手 御城坂

遊軍

一 一三之手 内町明屋敷前ノ諸杉小路江

一 老番貝ニ而右之場所江可致着到事

一二番貝ニ而

殿様明屋敷前江御出被遊候事

但、三ノ手御先達ニ而御旗奉行ハ武者奉行諸杉小路江

御跡供、御武具役ハ御賄役迄明屋敷前江罷越可申事

一 三番貝ニ而御行列、外出張之御郡奉行御代官御賄

役引続、老番手ハ順々諸杉社内江繰込、内町通御

藏小路ハ一之手は新馬場御門内江繰入罷在、二之

手ハ同所御門外西側江片寄控罷在、遊軍ハ御門内

江繰入罷在、三之手御旗奉行ハ武者奉行迄御跡供

ハ御武具役ハ御賄役迄新馬場内馬出しハ北之方江

控罷在、夫ハ御作事御門通御先達ニ而出張之御郡

奉行御代官御賄役ハ老之手・二之手・遊軍と、順

々元之通諸杉小路江相集り、殿様御作手御門ハ御

帰被遊、御小腰ハ中警士迄表御門迄御供、其後御

跡供之分も元之処江相集り可申事

但、四ツ時前後と相心得可申、并宅ニ而支度兵粮用意

罷在可申、遠方之面々は三御門外途中ニ而御相図待合

候儀は可為勝手次第候、

一 御殿諸役人御手組之面々たり共、五ツ時出仕之事

三六 西洋流大筒、製造命令（嘉永七年二月二十八日）

一 左之通御用人を以申談

西洋流大筒

長ホウイッスル

太田彦太夫

竹村次郎左衛門

右今般御製造被仰付候間、取調懸り尤伺事請取物等

之儀は左之面々江可申達事

西山平右衛門

田中伊兵衛

鳥居五兵衛

右ニ付懸り被仰付候間、伺事并渡し物等取斗可申事

三七 美含郡よりの狼火試し（嘉永七年三月十一日）

美含郡ハ之相図試之儀、同所矢筈ケ嶽ニ於て昼八ツ時

と夜ニ入焚火を揚候ハ、宮内繩手において請継之焚

火を揚候様申談候、尤天氣次第之事

但、右之通之処、昨日より雨天ニ付今日は延引、明日焚候趣、御郡奉行申達、其段違御聴、

三六、西洋流大砲、鑄立相済（嘉永七年三月十三日）

一 兼而被仰付置長ホウイッスル御筒、今日出町目當場少し西ノ場所ニ於て御製造有之ニ付、懸り之面々麻上下着用、昼後より右場所へ追々罷越、鑄物師職人共ハ早朝より罷出、夕七時鑄立無滞相済、

一 右御筒御鑄立ニ付、殿様為御見物右場所江御出被遊尤ハツ半過御出、七ツ時過御帰り、御帰り後伺御機嫌、御小納戸へ差出、

三七、砲術、新古流修業選択は好みに委す

（嘉永七年三月十五日）

一 左之通御目付へ申談

西洋流砲術近来御取上ニ而、両師家へ御預ケ被仰付、御試も有之候得共、元來長門流・異風流・荻野流共

取用無之と申訳ニハ無之候間、古流之方執心之面々

ハ玉丁火矢砲杯其外不依何実用之火業繁々相試候様被仰出候、西洋流之義（儀）ハ上御流義（儀）と被仰出候ニ付、

若哉格別執心ニも無之候得共、無余儀訳柄ニ而名寄不差出候而ハ思召ニ触可申哉杯と其意味ニ泥承之候而

ハ御不本意ニ被思召候間、其段心得違無之様可申聞旨被仰出候、

但、兼々被仰出候通、当時砲術格別御引立之折柄ニ付、銘々手覚有之候ハ、本文之通新古流之無差別実用專一ニ相心懸ケ可申候、然ル処常々新古流共格別鍛錬ト申ニも無之如何敷事共申唱候様も有之哉之趣、万一心得違候而ハ思召ニ触可申、無余儀御沙汰も可有之候間、此段も為心得無急度申聞置候様被仰出候事

三〇、砲術、早打稽古は御家流のこと

（嘉永七年四月朔日）

左之通砲術兩師範門弟共江申談候様、文武懸り御目付江申談、

砲術早打稽古之儀組立候節は、御家流打方稽古可致、

尤独り立候節は両流是迄之流法相用可申事

三二 多田弥太郎行衛、相知れ申さず

(嘉永七年四月二十日)

口達

私恠弥太郎儀、去月廿七日縁家伊佐村桜井太中方江罷越、帰不申候ニ付承り合候処、翌廿八日生野表江罷越候趣ニ付、早速人差遣相尋候処、此方江一寸立寄直様罷歸申候由、右者上御為筋之儀ニ付播州辺々大坂江罷越、不遠内ニ罷歸候由、夫迄者病氣之趣ニ取斗置候様生野表江申残(置カ)候付、又候播州大坂辺江心当り之方江聞合差遣候処、一向手掛り無御座、猶々吟味仕候得共、今以罷歸不申候ニ付、此段御達申上候、以上

四月廿日

多田助之允

親類

桜井宣藏

藤沢 勇

三三 多田弥太郎、中川候へ上書 (嘉永七年四月)

『多田弥太郎上書一件』

一 四月十六日、仙石家之家臣多田弥太郎と申者、此方江申聞度子細有之、出石表より出府致し候趣申込候付、側役阿坂右仲及面会候処、一通子細申述候上、左之者共在所表より呼出し相糺呉候様申聞候ニ付、一応承置候趣挨拶為致置候事

家老

荒木頼母

用人

乗竹 弼

目付

服部権記

〃

太田市左衛門

但、右ニ付弥太郎儀者此方ニ而長屋相渡、諸賄申付差置之、尤右仲出立後、目付衣笠文藏江掛り申付、側役小泉小一郎申談為取扱候事

私主家政事向之儀ニ付奉願上候口上覚

乍恐奉申上候私主家政事向之儀ニ付而者、先々年以来

度々御厄介ニ相成、以御陰稍致回復、追々静謐ニ押移可申と、家中一同難有存罷在候処、兎角旧染之弊風一洗難仕、老職之者共家政向我儘ニ取扱、邪曲不法之儀共品々有之候処より一家中心服不仕、又々国々一大事ニ可及と深心痛罷在、此段臣下之身分不敢取主人ニ諫言仕、取押可申筈ニ候得共、当時弊藩之儀は不一形事勢ニ而、老職之者共私威致増長、善惡とも主人之威光貫兼候姿ニ有之候場合江、卒爾ニ諫言仕候而は、都而騒動之基と相成、為筋不宜と見込候付、委細事情申陳御両家様江密々御嘆願申上候、右奉嘆願候趣は当時年寄役堀鯉助并同人父隠居元年寄堀新九郎、先達而公儀領分之内村替被仰付候儀ニ付、彼是立廻り候由ニ而主人ノ寵賞有之、家格知行迄致加増昇進、政事向之儀、無遠慮取斗候様被申渡、万端被打任候処、自然勲功ニ預候哉、以来我儘之取斗品々有之、(此以下同)其上当人共表ニ精忠と為見掛候得共、元来性質之姦曲難掩、万端国政取斗候内、自家之威勢一家中町在江振廻候心底自然と相

頭、主人之威光立兼候姿ニ相成、臣之身分実以見聞ニ堪兼候儀ニ而、此上此儘罷過候へ、姦曲之取斗致増長候而は如何様之大事ニ可及儀茂難取斗と、慷慨切齒仕候もの余多有之、其内ニは諫言仕度と存立候者も有之候得共、先々年来総而諫言より事起候而、都而騒動之本と相成候処ニ懸念仕、無拠黙止罷在、徒ニ愁嘆仕候併此儘見過候而、万一公辺御沙汰ニ茂相成、差違候時ニ臨候而、其節後悔仕候共、無其詮事ニ候得共、唯今ニ茂分込而諫言仕、縦便讒姦之餌ニ相成、無実之罪ニ致落命候共、臣下之志操丈相立候歟、兩人と差違相果国悪を除候歟、孰れ此儘罷過可申訳ニ無之と一応存立候得共、得と相考候処、右様之次第取斗候而は当時節柄之儀、公辺并他国ニ対而外聞茂不宜、其上事之成敗無覚東上、主人江懸心配、一家中之人気茂騒立、却而為筋不宜と見込候ニ付、何卒主人江諫言不仕候共、無事静謐之取斗方茂可有之と相考、即私限御両家様江罷出、御嘆願申上、当時海防御用意之折柄、何共奉恐入

候得共、散藩之一大事ニ茂可及事ニ候得は、乍御面働御兩家様より御内々主人江御助力被成下、家政向御吟味被成下、姦臣共御敗成之上、主人之威光相立、此上静謐相成候様、偏奉願度、既ニ先年来老職之者共不屈之儀有之、夫々重科ニ被成候所、先証茂有之事ニ候得は、当時老職之者共は屹度心掛相慎可申筈と存候処、不相替旧染之敝風ニ流れ候儀は如何之存念ニ有之哉と、段々心底之様子問合候処、必竟一旦之勲功ニ預候上、公儀御老中様始御兩家様迄、自分自由ニ取締候様之心得ニ而罷在候由、誠ニ以苦々敷事ニ存罷在候、何分ニ茂御兩家様ニ而御吟味不被成下候而は、落着難仕と見込候付、態々御府内江罷出、右嘆願申上候条、不悪御辨察被成下、主人江御助力被成下、早々御吟味被成下候様、幾重ニも奉願候、右ニ付、右兩人之取斗御吟味被成下候手掛ニ茂可相成と存候ケ条之内、重立候事共拔取、左ニ申陳候、

一元年寄當時番頭格、其節無役罷在候早川庄兵衛居屋

敷、其外明屋敷兩三軒取払、右材木ニ而先代播磨守様御幽棲被為在候御屋敷跡江、御遺愛之樹木等切払自分屋敷結構ニ致普請候ケ条、先君并一家中ニ対而無礼之所業と被存候事

一 居屋敷門内江御村替祈誓之神霊と唱、神社一字致造營、町奉行・郡奉行江内々申談、町・在江右神社江致参詣、致参詣候者江は赤飯神祝棟上之祝餅等相配、夫ニ付、賽錢進物等夥敷取納、惣而卑劣之振舞、為重役之身分不似合之所業有之、第一新ニ神社造營多人數集候儀、公儀御法度ニ相背候事

一 臣下之身分、精忠心掛候得は、自分之勲功茂主人江相讓可申処、神社致建立候ニ付、祝文相認、御村替之功は、全自分之祈願ニ而致成願候様書綴、右書面大坂銀主とも江差遣為致一覽候儀、主人江対而不忠之筋と相聞、第一公儀より御村替被仰付候趣意、如何相心得候哉、心底難分く被存候事

一 當時海防大切之折柄ニ候得は、自分ニ茂屹度心掛、

士風引立可申処、病氣ニ茂無之隠居致し候上、直様致剃髮候条、臆病我儘之所業と相聞候事

一 隠居被申付候得は、当分之処相慎差控可申処、隠居被申付候翌日より度々漁獵ニ罷出、聊茂不顧憚事

一 其身隠居ニ而対面所表玄関より製詞為掛、外年寄役同様致出仕、諸役所江出席、政事向專取扱候条、家中一同心外ニ存候事

一 海防大切之折柄ニ候得は、事ニ寄、隠居之身分ニ候とも時々権宜ニ而及助言候儀有之間敷共難申候得共着到人数揃等内試之節、為隠居之身分、勤仕同様其場ニ罷出、主人床机之左右ニ立塞り、万端致差図候条、法外至極之儀と家中一同立腹仕候事

一 主人より直書を以節儉之儀嚴重申候処、右聊茂不相守、家中懇意之面々其外共、度々饜応致し、眼前直書之表ニ相背候事

一 役人之外、平士役人小者之分ニ而は、至極困窮ニ而今日を凌兼候者余多有之処江、兩人儀奢ケ間敷所業

致ニ有之、平士・小役人・小者之分ニ而は一同致切齒候事

一 賞罰不正儀品々有之、家中一同心服不仕候事

右ケ条之外、難心得所業有之、御吟味被成下候ハ、逐一相分可申、其内ニ茂政事向專取扱候迎、善柔阿諛之族江は勝手ニ為致加増昇進、心掛能候迎、私之宿意有之者江は嚴敷差押、恥辱を与候類、別而我儘之所業と相聞、將又海防之儀ニ付、侍分江心付金遣候節茂、小役人・小者江は聊茂心附不遣、右は着物等貸渡候故之由ニ相聞候得共、右心付之儀は諸家様と茂御同様傍人氣御引立被成候訳と承候処、却而自分一己存寄ニ而我意押募、小役人・小者江は一錢茂心付不遣、右ニ付小役人・小者共一同相怨罷在、人氣引立不申、全偏頗私曲之取斗と相唱、當時重役之者共を恨候姿ニ相聞、海防武備之大権相抽候次第、別而主人江不忠之所業と被存、其外品々如何之取斗有之、家中一同心服不仕、追而国之一大事ニ茂可及

と心痛罷在候条、幾重ニ茂御明察被成下、早々御吟
味被成下候様、重々乍恐奉願候事

右奉願候条、不惡御聞取御執成之程偏奉願候、以上

寅
三月
仙石讚岐守家米
多田弥太郎

阿部播磨守様

御側衆中様

中川修理大夫様

御側衆中様

三七三 多田弥太郎へ書き付けをもって申し渡す

(嘉永七年七月二十三日)

警固之場

依田庄兵衛

御徒士目付老入

右弥太郎囲場江罷越、御書付之趣申渡候様申談、

一 御書付左之通

多田弥太郎

其方儀、家政向之儀ニ付及承候廉有之、難捨置存込

候得は、申出方も可有之処、是迄聊之心付茂不申聞

却而家法を犯し、其筋江も不相届、軽卒ニ致出奔、

剩近親之中江及内訴候始末、不埒之至、重々不屈之

事ニ候、依之重咎可申付処、後悔先非候趣申出候付、

出格之以慈悲不及其沙汰、在所江差戻、父助之允江

預ケ申付候、已後屹度謹身可罷在事

寅
閏七月

三七四 渡辺要人自滅届 (嘉永七年四月二十八日)

渡辺要人

右同人親類江御預被仰付置、乗竹弼宅江囲場補理差置

都而親類江御任セニ相成居候処、今夕自滅致し候趣口

達書を以親類共ニ申達候段、夜九ツ時御用人月番杉原

源太左衛門御用番宅江罷越申達、口達書左之通、則同

席中江順達差出候、

口達書

渡辺要人儀、今暮時自滅仕候仕末左之通御座候、

一 乗竹弼せかれ孝太郎儀、今九時過弘道館を罷歸平常

之通因場江挨拶罷越、次之間江脇差相脱、便事江罷

越、直ニ食事仕、続事之者罷越居候付挨拶仕、更而

稽古場江相帯候短刀相帯、砲術稽古江罷出、七ツ時

後を其儘鎗術稽古江罷出居申候、

一 乗竹弼儀は今朝を在宿仕、夕方庭前江罷出居候処、

七ツ半時頃柘植九郎左衛門罷越候付、居間ニ而暫咄

合仕、暮時九郎左衛門引取懸要人因場江面会罷越、

及挨拶候処返言無之、怪敷体見請候得共錠前有之、

委敷様子茂相分兼候付、直様弼相呼錠前相開相改候

処、孝太郎今昼後次之間江差置候脇差致如何取入候

哉、右脇差ニ而自減仕居申候、右ニ付早速御医師長

谷川諡齋申遣致診察候処、最早療養致し方無御座旨

申聞候、

一 孝太郎妻并弼・益介女・下人等へ間隔り居候付、一

向様子茂存知不申候、

右之通御座候、以上

四月二十八日

渡辺要人親類

稲垣広門

本間虎五郎

三五 多田弥太郎出奔届 (嘉永七年五月八日)

口 達

助之允せかれ弥太郎儀、従先達而他出仕行衛相知不申

趣御達申上候、再応相尋候様被仰出候付、猶又心当之

向吟味仕候得共、一向行衛相知不申出奔仕奉恐入候、

遠隔之処相尋候儀ニ御座候ニ付、御届も延引仕候、此

段御達申上候、以上

五月八日

多田助之允親類

桜井宣藏

藤沢 勇

三六 御家流は御家軍法と改称

(嘉永七年閏七月二十五日)

左之通御目付江申談

是迄御家流と唱候処、向後御家軍法と唱可申事

右之通向々江可被申談候、

高橋平五郎

三七 多田助之允・高橋平五郎へ詰問書

(嘉永七年八月十日)

多田助之允

せかれ弥太郎儀、先達而致出奔出府之上御近親様御屋鋪江推參、書取を以品々申上候儀、父助之允始外々同意之者無之由申上候、弥助之允同意無之哉、其砌差上候書取之趣不都合之事而已ニ付、段々深く御利解被成下候処、全く強情募り候儀と恐入後悔仕、此上急度改心仕、謹慎相守可申間、御慈悲之御沙汰被成候様相願、向後我意申張候様之儀毛頭仕間敷、万々一右体之儀も有之候ハ、一族ニ至迄重キ御咎被仰付被下度、此上急度輕卒之儀無之様相慎可申、只管御慈悲之程致嘆願候付、別紙之通於江戸表弥太郎江被仰付候、助之允始一族共弥太郎嘆願之趣同様相心得候哉、為念心得及尋候事

先達而多田弥太郎儀致出奔、出府之上御近親様方江差上候書取、せかれ甲太郎代書致し候趣ニ付、同人江相尋候処、代書致し候ニは相違無之候得共、聊申合等致し候儀ニは無之、無何心執筆文ケ致し候段申出候、兼而其砌平五郎儀承知ニ而執筆為致候ニは無之哉、及尋候事

三七 多田弥太郎上訴につき、藩主直書

(嘉永七年八月十二日)

別紙之通、中川氏ハ申来候趣は此方ニ於ても至極尤之儀と存候、此度弥太郎出府一条所置之儀は実以不容易事ニ有之候、就而は此後誰ニ而も為メ筋と存込候儀有之候ハ、幾度も其筋ハ申出候様可致ハ勿論之儀ニ候得共、右様輕率之心得違致候者有之ニ於ては、屹と嚴重之咎も可申付候、此段一統可心得候、以上

寅七月

中川修理大夫直書

錢 七文

此度弥太郎出訴一条先々落着ニ相成御安心之儀存候、

錢 五文

右御所置之儀は拙者御相談之上内々閑老へも申上、御

錢 三文

指図も有之候事ニ候得は、不容易儀と存候、尤此度弥

太郎之所為不届ニは可被思召候得共、深先非ヲ悔候趣

ニ付、出格之御憐愍を以重キ御咎も無之候得共、此後

又候右様之心得違仕出し候者有之ニ於ては、嚴重御咎

も被仰付可然と存候、已後心得違之者無之様御家来一

統江精々被仰付候様有之度と存候、此段為御含得御意

置候、以上

閏七月廿三日

正月十五日

仙石織人

三七九 錢小切手発行 (嘉永七年十二月十一日)

三六一 松繩手に台場設置 (安政二年五月晦日)

一右之通、町・在江相触候様兩奉行江申談

近来錢払底、一統難渋之趣町方より願ニ依而、此

度左之通錢小切手差出候間可致通用候、尤引替之

儀は於産物会所引替可申事

一今朝も松繩手台場江砂置、御家中之面々罷出、五ツ

時々同席(年寄のこと)共罷越候内、昼前、殿様御側

向斗(向)リニ而右場所江御出被遊、暫之内御覽被遊、御

弁当被成下旨御側御用人を以被仰出、一統頂戴仕、

御帰之節松繩手兩側江一統平伏仕、御意有之披露御

取合御年寄仕候、御帰後伺御小納戸江差出ス、

一次場所今日切ニ而大体出来ニ付、御家中之面々今日

切ニ而不取出、跡仕立之義(儀)は郷人足ニ而出来之事

三三 御意により高嶋流を御家流に

(安政二年六月十七日)

高嶋流之儀は深趣意有之、家流ニ致し候得は、家来一

同末々迄出陣ニ鉄砲を持候程之者江は学セ度、尤壮年

之者厚世話遣し、末々之ものも同様ニ付、相願候は引

立候様一同江無急度可申聞置候、追而趣意之程は可申

出候也、

六月十七日

三三 荒木帯刀、謹慎御免(安政二年十二月二十七日)

荒木頼母

御自分祖父帯刀儀、如何敷儀相聞候付、一昨丑年親類

を以身分相替、急度謹慎罷在、親類之者ニ茂無余儀用

弁之外は先ツ面会仕間敷、出入之もの江は懇意之もの

たり共決而面会不仕候様以御書取被仰付置候処、其後

慎方宣趣相聞、御自分儀も在府中出精ニ被相勤、只帯

刀江被仰付之儀ニ付而は嘆願之儀も有之、旁以慎被遊

御免候、此上帯刀儀は別而身分大切ニ相心得可申、御

自分儀も万端大切相心得候様被仰出候事

三四 藩主、高嶋流引き立てを命ずる

(安政四年十二月二十四日)

左之趣於御前被仰付候、但、御用人御目付江申付置候事

仙石織人

磯野逸騎

荒木頼母

岡部長左衛門

高嶋流引立之儀先般堀新九郎江申付置候通、以来者

新九郎同様相心得厚く引立可申事

堀 新九郎

此度織人始一統江右之趣申付候間、其旨被相心得、
申合此上厚く引立可申事

弟并召仕ニ迄可被申付置候、

右之趣御家中江各々可被相違候、以上

二月廿四日

御目付中

磯野逸騎

三五 高嶋流調練実施につき、町方へ申し触れ

(安政五年二月二十四日)

町方へ

当春於野外高嶋流調練御覽被仰出候付而へ、町方之者
共中ニは種々取沙汰致し、他向江も申触候哉ニ相聞候、
右は御家中之内高嶋流心懸候向斗調練致し候を御覽被
遊候事ニ候間、彼是と不取留儀共申触間敷候、勿論御
覽之事ニ候間、町方拜見ニ罷出候族子共ニ至迄、礼儀
正敷狼ヶ間敷儀無之様急度相嗜可申候、万一心得違之
族有之ニ於てへ、急度申付方も有之候間、此段も相心
得可申候、尤其節火之元別而入念可申事

三六 錢切手、新切手と引き替え

(安政六年五月十八日)

町在へ

是迄通用之錢切手摺難見分も有之ニ付、此度相改候
間、所持之錢切手不残明十九日〆廿九日迄ニ産物会所
江可差出、引替相渡候事
右之趣可被相触候

五月十八日

(安政六年六月四日)

町在へ

此間相触置候錢切手引替残りも多分有之趣、右は無差
支相改引替候儀ニ付、残所持之分、来ル十日迄ニ無遅

滞差出可申事

右之趣可被相触候

三六 家中へ養蚕を奨励 (万延二年二月十一日)

当国は養蚕第一之土地ニ候処、昨年於京都も被仰出有之、且交易方ニ付而は別而利方ニも可相成之趣、依而は追々御家中を始町・在一般ニ相成候様致し度、屋敷内又ハ明地等ニも成丈ケ桑苗植込置、専ら養蚕之心懸ケ有之度、居宅手挟^(後)之面々ハ座敷等差塞ぎ、御用談等不都合之事茂可有之ニ付、若し右等ニ而差支候向も有之候ハ、僅か之日数ニ茂候間、当節柄尚又互ニ失礼等申合、玄関又ハ端近之場所ニて御用向対談致し候儀、銘々勝手ニ致し、勿論近親附合等も右之内は相止、互ニ手間支無之様申合置、可然候、以上

二月十一日

仙石織人

御目付中

三八 堀笑山・新九郎父子切腹、執政陣処分

『但馬史料』三五 「岡本氏家伝書抄」 宗鏡寺藏

文久二年十二月二日、御箇条書を以御尋之

申開出来不申、夜八時切腹

堀 新九郎

父同 笑山 兩人

同六日夕七時御用番早川庄兵衛殿御宅御用左之通り

一 百石減し折々御城代間出仕 仙石織人

一 蟄居・隠居悴江百八拾石 岡部長左衛門

一 三拾石減し慎 荒木頼母

一同断 磯野逸騎

一 蟄居・御繫扶持十五人扶持被下 新九郎 堀 鯉 助

一 三日中屋敷差上 堀 鯉 助

一 蟄居・隠居・御繫扶持十五人扶持 土岐基之助

一 御役御免折々御用人部屋江被出候様 堀 丹 宮

一 御作事奉行席、御役御免 堀 半兵衛

一 御役御免、慎、御番入 堀 敬之助

一 御役御免 太田忠兵衛

一同断

一 蟄居・隠居・御繫三人扶持被下
早々養子いたし候

岩 市左衛門

候事

十二月

提 藤太夫
名代三左衛門

磯野逸騎

三九 仙石織人ら謹慎御免 (文久二年十二月十五日)

御自分儀慎被仰付置候処被遊御免候事

仙石織人

三〇 多田弥太郎復位 (文久三年二月二十日)

右同断

磯野逸騎

せかれ弥太郎儀被召出、御充行(宛) 御小姓頭出席

右同断

荒木頼母

式拾俵式人扶持被成下、御小姓 多田助之允

右同断

堀 丹 宮

組沓番組江組入組席惣次第共、 召連 せかれ 弥太郎

右同断

堀 半兵衛

青木岩次次、弘道館勤

右同断

堀 敬之助

三一 他所修業の面々へ扶持下される

仙石織人

(文久三年二月二十四日)

御自分せかれ芳太郎儀、追々成長も致し候儀ニ付、文

武修業格別出精為致可申処、其心懸茂薄キ趣、此上文

武之儀は不及申、追々様子宜敷御用ニ相立候様教諭可

被致、并御自分家筋之儀、身分謹慎、曾祖父格別忠功

之遺意相継、急度御為筋相成候様勉勵可被致旨被仰出

一 御家中之面々不時被為召着具前御覽、并諸芸茂右同

様被仰出候間、其旨兼而相心得可申事

一文武他所修業之面々江者式人扶持被成下候事

一 辺国相廻り候節は、日割雑用被成下候事

一 他所免許之節御手充被成下候事(普)以下同

一 師範并講師御締役を人別申達之上、弘道館江寄宿致し志之文武専ら修業之上ニ而他所修業相願候事、尤寄宿中少分之御手充被成下候事

右之趣御家中江各々可被相達候、以上

二月廿四日

稲垣広門

御目付中

三三 英船渡来に関する加藤弘藏内密の書翰

(文久三年三月八日發の便) 同月十四日の項に記載

一 先達而奉申上候英吉利船(イギリス)が去廿日外国懸り御老中江書翰ヲ呈上仕候、其大略は昨年生麦ニ而薩州島津三郎家来之者英吉利人を殺害致候ニ付、其節英吉利ニストル 右殺害致候薩州人を公辺ニ而御捕被成、早々日本国法を以御刑罰被成候様申上置候得共、公辺ニ而其御様子も無之ニ付而は、条約書之旨とハ違ひ、公辺は日本国中之御政事被成候御權威無之様相見候付、条約書ニ御背被成候過代として、十万ポ

ドステルリング凡日本之を英国政府江御指出可被成 三拾万両 旨、書翰中ニ御座候、但、此返答は廿日之間ニ可被成、若延引仕候得は京師江罷出御掛合可申旨ニ御座候、但し、此儀は公辺ニ而も極密ニ被成候儀ニ而、御役人ニ而も御存知無之御方も御座候程之儀、私儀が右様之儀を申上候而は実ハ公辺江奉恐入候儀ニ付、極御内密ニ被成下度奉願上候、且亦其節別紙差出申上候ニハ、公辺は公辺又薩州江は別段軍艦差向、殺害之過代として二万五千ポンドステリング凡日本之七 万五千両程 を請取候心得ニ付、江戸ニ而成丈平穩ニ被成度被思召候得は、御老若之中敷、又は外国奉行之中老人御同船仕可申旨も書翰中ニ申上候由、此別紙之御返事は明廿一日四ツ時迄御返事可被成、若し御返事延引ニ及候得は、御役人御同船不仕、直様薩州江罷出候旨申上候様子、右ニ付、則翌廿一日・二艘出帆、薩州江罷越候由承及申候、但、書翰之儀は私共仲間之者翻訳仕候儀ニ付、聊疑敷儀も無之候得共、廿一

日直様薩州江出帆と申儀は、未々極々実説とハ不被
申儀ニ御座候、

御名

何分御内密ニ被成下度奉願上候

一 別紙海陸二軍位階表と申書之儀は、御軍制改革懸り
御役人衆ヲ申上ニ相成候書ニ御座候、其内已ニ被仰
付候御役儀も多く御座候得共、未々悉皆被仰付候迄
ニは相成不申候ニ付、是も極内々右御改革方御役人
ヲ拝借仕候儀ニ付、内々奉供御覽候、朱書之分ハ西
洋官名等ニ御座候、

二月廿六日

加藤弘藏

三三 出石藩、京都警衛場所（文久三年四月二日）

京都表先月晦日出別便相達候処、先月晦日板倉周防守
様御内、高田亘・辻七郎右衛門ノ御達之儀有之候間、
唯今屯人可罷出旨申来、早速板倉様御旅館へ麻見四郎
兵衛罷出候処、別紙両通高田亘ヲ被相渡候由、則御達
書式通相達左之通、

三四 朝廷出勤要請に関する情報探索報告書

（文久三年四月七日）

京都御警衛被仰付候間、得其意、場所之儀は下鴨口
より大原郷辺と相心得、諸事御嚴重可被申付候、尤
勤方等委細之儀は松平肥後守牧野備前守江可被承合
候、且別紙之面々口々御警衛被仰付候間、為心得相
達候、

一 京都表御警衛之儀此間出立荒木頼母去ル五日京都入
口ニ而見受候之処、九鬼様御人数被出居、且織田様
御人数之着を待、通候様子方老板之峠ニ見ほし之者
出居候位ニ有之、御屋敷ニ着之処、麻見四郎兵衛ハ
大津江罷出候留守江所司代牧野様ヲ屯人差出候様御
沙汰有之、調度ニ河嶋武右衛門御屋敷江立寄居候付、
不取敢武右衛門罷出候処、公用人会ニ而、来ル十
一日ニ八幡江幸行之節迄之御警衛相調候哉相尋候段

申述候付、罷留留守居共江申聞御返答可申上旨申置
罷留候段申達、仍而翌朝四郎兵衛牧野様江差出、里
数も妨候儀ニ付、十二日之御間ニ合候段不安心ニ罷
在候段申達候処、其段書取ニ致し差出候様挨拶ニ付、
左之通り書取差出候由、

(書取略)

右通り御人数之儀ハ何分入込ニ不相成候而は不相濟
儀ニ付、此便着次第御人数御差出可被下、扱御警衛
と申儀ハ先ツ御番所之姿と見受申候、何分此人数を
以御防禦と申御廉ニハ有之間敷、御警衛之番兵御据
置と申御事哉と相察申候、何様御人数無之而ハ御請
書も出、松平肥後守様・水野様・両町御奉行・両御
目付様、禁裡附御二方様江御届御吹聴御案内等、夫
々取斗候次第ニ而、御人数御差出治定不仕と申候而
ハ不相濟儀ニ付、早々差出候様申来、

但、御人数多少之儀も四郎兵衛ノ公用人ニ茂為相尋候処、
儘ニハ不申、御分限茂有之儀ニ付、其辺ハ御□□□ニ而

御警衛是ニ而相勤り申と見切ニ而可然哉と相心得候段申
述候由申来、

一 右ニ付差懸り御用向有之ニ付、追付ノ出仕致し其方
向々江申談候様御目付江申談、則同席中江右之趣申
遣し、夜四時過ノ出仕、着便之趣御用番直ニ御目通
ニ而申上、

一 老ノ手御人数之内此度出張被仰付候面々名前書御目
付江相渡、只今出仕候様可申談旨申談、

(申渡儀式次第の二項は略)

一 左之書付御用人御目付江相渡し御用意之儀夫々申談
候様申談、

一 鉄砲頭 組頭書翰役兼

河合寛吾

鉄砲式拾挺

小頭老人

但、銘々十手持之事

足輕式拾人

一 並長柄奉行 目付役使番兼

食品斐夫

長柄拾五本

小頭老人

長柄足輕拾五人

一平士拾五人 人名略

平士鉄砲拾五挺

ほかに医師・祐筆・元ノ役各一名

賄役・徒士各二名

(ほか持參諸道具名は略)

*一行は四月八日四時出立

三五 加藤弘之、御宛行返上願 (文久三年七月十七日)

私儀先年従公儀洋書御調所教諭方江出役被仰付、右御役所江長々引越罷在候処、御充行其儘頂戴仕、其上昨年是不存寄席等迄被仰付、冥加至極難有仕合奉存候、且又弟静雄儀不都束者御座候処、不存寄当时海防御手組応援役被仰付、重々莫大之御高恩冥加至極難有仕合奉存候、右ニ付而は猶更格段御奉公精勤仕、奉報御重恩度奉存候得共、此節公辺御用向寸暇も無御座、存意之程茂行届不申心痛仕居候得共、何分ニ茂御用济御差戻之御模様ニも押移り不申、此上限茂無御座御模様ニ

御座候得は寸忠も難尽、是迄之通御充行頂戴仕居候而は重々奉恐入候御儀奉存候、右ニ付甚不敬之申上方ニ而奉恐入候得共、私頂戴仕居候御充行其儘弟静雄江頂戴被仰付、相応御召仕被成下候様奉願上候、何分前条申上候通、公辺御用際限茂無御座候ニ付、御家御奉公は少茂不相勤、長々之処御充行其儘頂戴仕候而ハ奉恐入候、且数代奉蒙御厚恩候家筋之儀、別而当御時節之儀、何等之御用等も相勤可申之処、其儀無御座、甚以奉恐入、日夜不堪心痛罷在候付、不得止事愚存之趣奉願上候条、幾重ニ茂被為聞召分被成下候者、以御陰寸志茂相立、右公辺御用茂乍相勤、是迄之通御奉公之心得ニ而御為筋之儀者奉申上候様仕度奉存候、若又万一公辺御用相济御差戻相成候者、其節嘆願仕候儀も可有御座候間、是又宜御執成奉願上候、何分茂御慈悲御憐愍之御沙汰、偏ニ奉願上候、右之趣不苦思召候者何分宜敷様奉願存候、以上

七月

加藤弘藏

(文久三年七月二十日)

弘藏願之趣被聞召届、

加藤弘藏

是迄被下置候御充行其儘

名代

白田弥右衛門

弟 静雄江被成下、御馬廻り

弟 静雄

老番組江組入、組席惣次第共

岡部平馬次御広間江番入

三六 多田弥太郎、海岸筋見分出立願い許可

(文久三年七月二十四日)

御小姓頭達

近国海岸筋之儀ニ付、京都表堂上

御方ニ御内々御頼被仰付越候趣御 多田弥太郎

座候ニ付、此節若挟(袋)・丹後・但馬海辺へ

罷越、暫逗留仕度旨願書差出候而差出之、

尤差当り之趣ニ而即刻願濟申談

三七 中立売御門、警衛御免 (文久三年八月四日)

從京都表御便相達候處、此方様中立売御門御固松平相

模守様江代被蒙仰候旨申来、恐悅之至ニ候、此段承知

可有之候、已上

右之通於出石表被仰出候、然ル處、猶又京都左之通被

仰出候旨同所申来候、

中立売御門御固被仰付置候處、家来之者嘆願、尤之儀

被聞召、依之御固御免被遊候旨伝奏野々宮様衆ノ口達

ニ而被仰渡候、已上

右之趣承知致し候様御家中江各より可被相達候、已上

七月三日

竹内十学

依田市右衛門

三八 中条右京よりの書状につき、年寄召集令

上田市立博物館旧文書

中条右京ノ飛脚今夕相届 別紙之趣申越上、殿様江も

早速差上候処、直ニ長岡藤右衛門を以拜見被仰付候、
右ニ付何角御相談之上申談置儀御座候付、明朝御用番
様、御宅へ御寄合御評議仕度候間、乍御苦勞五ツ時ふ
御出席被下候様奉存候、右之段得貴意、以上

八月十二日

谷津助太夫

早川庄兵衛

仙石織人様 承知仕候

乗竹 弼様

稲垣広門様 承知仕候

猶以助太夫方へ庄兵衛居合候間、兩人ふ御差達差出申候、
別紙申入候付、御用向之義儀ニ而丹波路一日半限之飛
脚、堀様迄差上候間、此書附ヲ以堀様へ申上被下候
上、金三步式朱飛脚へ御払為被下候、以上

八月十日

中条右京御

米木錠太様

三九 三條西季知、多田弥太郎の派遣要請

上田市立博物館旧文書

秋冷加候、弥御堅固珍重存候、然者御家来

多田弥太郎

高橋甲太郎

過日建言之儀ニ付、相尋申度御用筋候間、右兩人早々
御差登可有之旨、御親族辺ニ而従当方可申入要路之方
々ヨリ沙汰有之候条申入候、呉々早々上京之様御取斗
可然存候、仍如斯也

八月十日

季知

仙石讚岐守殿

追而是迄御文通之儀も無御座候得共、本文之次第

ニ付、以書状申入候也

仙石織人様

堀 丹宮様

中条右京

以手紙啓達仕候、秋冷相催候、弥御安恭珍賀奉、然

者去月ヨリ他行之処当月七日止此帰京仕候、同十日

早天、三条西中納言様ヨリ御使来候ニ付参殿仕候之

処、直ニ中納言様御面拜有之候、先達仙石家へ裏門

御固之勅命有之、其節者京師出役人家老荒木頼母等

申人度々来ル、家来之者ヲ御断之次第相願候様子等

茂有之、其次第杯モ不存ニ付、迹(跡カ)ニ而承候得者、主

人ニ茂詞無之候様承知致し候、依之此度内御用之義(儀)

有之候得共、表向伝奏役ヨリ相達シ候得而者、屋敷

留守居之者老人伝奏月番江呼出、相達候也、左様致

シ候得者又荒木頼母も聞、差止候様之事有之候得而

者、忽仙石家之為宜無之、依之家来之者ニ茂極内々

ニ而其上江相頼入候間、右之次第者以口上書国家老

中へ其方ヨリ申遣しくれ候

右之通り 中納言様ヲ被仰付候間、左様御承知可被

下、如斯謹言

八月十日

中条 右京

仙石織人様

早川庄兵衛様

堀 丹宮様

三条中納言様ヲ其大君公江御深筆老通之御請取可

被下候、以上

四〇〇 攘夷祈願大和行幸に關する諸家動向報告

上田市立博物館旧文書

進啓左之通り被仰出候ニ付、不取敢申達候、

為今度攘夷 御祈願 大和国行幸 神武帝山陵 春

日社等御拜 暫御逗留 御親征軍議被為在 其上神

宮行幸事

右之通り被仰出候事

八月十三日

右之趣ニ付、御供建等之御模様、其外諸家之模様承り

可申達とも相心得、少しニても何ぞ相分り候事は無之

哉と、伝奏其外手筋を以相尋合候得共、未だ前文之次

第被仰出候(斗)ニ而、何も余ニ被仰出も無御座由ニ御座

候、手祓^{マツ}承り合、相分り次第可申達候、下説ニ而ハ諸家御警衛罷出居候人数御供ニ相成り可申と、何々種々之風聞も有之、一説ニ而ハ大名之御供国主とも申、様々取沙汰御座候得共、取留候事ニ無之候間、相分り次第一便を以可申達候、万一、君上御上京等之筋ニも相成間敷も難斗、且者御発興等ニ相成候得者、急而御繰出しニ可相成、一ノ手之御人数は急々出張之儀可申達共難斗候間、左様御承知被置可被下候、当月之下旬御発興とも申候得共、何分前文之次第斗之被仰出ニ御座候而、余は一向何事も相分り不申候間、左様御承知被置可被下候、右之段得貴意候、以上

八月十五日

荒木頼母

御同席中様

四〇一 家老の交替要員、上京要請

上田市立博物館旧文書

進啓此度御親征被仰出候ニ付而者、自然人氣ニ□□無

之御事、且者何時如何様被仰出有之哉も難斗御座候間、御同席之内御老人御出京相成候様奉存候、夫与申も先便申達候様、私儀ニ付張紙等致し候事ニも有之候間、定而私義^儀引取も可被仰付、夫ニ御直ニ申上度事も有之候間、一応帰国之儀も申上置候儀故何ニても帰国可申仰付、依而此段も申達候儀ニ而、暫時之間も明置候事心配致し候間、御老人御出京相詰ニ相成候方与奉存候、万一御同席之中ニ而御出京ニも相成兼候ハ、御番頭ニ而仙石晃之允江仰付候而者如何可有之与奉存候、心付儘御相談申達候も、追々不容易御時勢ニも押移り候事故、此段申達候、将又兼而先便御相談旁々申達置候当地詰之面々交代之儀、百日位之詰ニ而交代と申而者御出方多ニも相成儀ニ候得共、実ニ夫ニも難替形勢ニ而、筆紙ニ尽しかたく、何分百日余も相詰候而者、自然不得之儀も出来ニ而、御為ニも相成中間敷与奉存候、御答も不被下候内ニ又々申達候も如何与存候得共、勘考候得共、勘考之程早く交代ニ候方、くれ〜も御為

筋与奉存候、右之段得貴意候、以上

八月十五日

荒木頼母

御同席中様

四〇二 藩主に上京態勢準備を促す荒木頼母

上田市立博物館旧文書

追啓今日夜分ニ相成、中条右京方中条当九日帰京、此度御親征御軍議之様子探

索周旋致書面差越、左之趣為知申候、

別紙申入候、今朝御尋之近国御大名衆上京之義者先(儀)以下同

日々御奏聞ニ相成候処、今以上京之義者不被仰出候

得共、其内行幸之日限相知レ候上、様子ニ依而御上

京ニ相成候得者宜敷と奉存候、

右之通申越候、右者急度慥成方々聞出し相成候義ニ付

浮かかとハ被聞取不申候ニ付、夜ニ入猶又為書取申候、

何分いつ何時と申事不相分時勢ニ推移候ニ付、御上京

御用意飽迄被遊置奉願候、尤御参内且軍中之御用意ニ

無之而ハ不相成と奉存候、

一先便被達置候(張カ)深紙一条も段々下墨候処、格別案思之

事も無之候趣、尊王攘夷と決心仕、御警衛御用を申

処江は手出し致し候訳無之旨中条右京杯も其辺周旋

致し居候事ニ而は、此段も得御意置候、以上

八月十五日夜認

荒木頼母

四〇三 弥太郎派遣要請に苦慮する出石執政陣

上田市立博物館旧文書

進啓 極々内密ニ而得御意候、去ル十二日夕、中条右

京方一日半限り飛脚差越、堀丹宮方書状差出候ニ付、

開封之處、別紙之趣申越甚不行届之書面ニ而、難解所

も可有之、全く御在京御年寄様始江相知候而ハ御差押

可有之哉と、深く三条西様御案思之趣ニて、右京江御

頼御差上有之由、右書面一通りニて者如何様之御事ニ

候哉、相分り(兼脱カ)かれは心配罷在、早速三条様之御直書

長岡藤右衛門を以、君上江差上候処、御覽後同人を以

御下り被遊、此趣申来候間宜取斗候様被仰出候、何連(計)以下同

とも右兩人早速上京不被仰付候而者相成不申義^(德以下同)ニ付、

直様可申談処、弥太郎儀美舍郡江参り居候ニ付、早々
 呼戻申遣、則今日兩人共早々上京候様申談候、御書中
 之趣ニ而は余之義とも無之、先達而建言一条之様ニ被
 相伺候、右は其砌段々御配慮ニ而元々ニ御取戻し相濟
 居候事ニ存候処、何ぞ右ニ付国家之御為方御尋等有之
 事哉、且又甲太郎儀右江携り候哉、兩名之御達ニ有之
 候ニ付、丹宮江内々申談内尋為致候処、決而弥太郎と
 申合建言致し候義は無之、唯々認候義被相頼候ニ付、
 多々相頼候事故認遣候而已之由ニ甲太郎相答候由、認
 候斗りと而其者一所ニ御呼出しと申義、何共合点参り
 不申、右京先達而参候砌も度々出會、酒杯吞候趣ニも
 承り候儀有之、甲太郎、心底之処何角疑敷、下墨罷在ニ
 無御座候、併右京書面と申、阿の人物故いか様之無分
 別相働キ可申哉、多々困り果候人物ニ御座候、附而は
 御手前様何角御心得ニも可相成と、極内々之写兩通御
 廻し申候、無分別ものニは致し方無之とハ乍申、此節

手荒之取斗も難相成、何事も相忍ひ、折を見合候ノ外
 無之と存候、只々其表之御取扱方万端御大切之事故、
 御如在(才也)は有之間敷候得共、右之趣名跡御手拔り無御座
 候様御配慮被下候様被存候、右之段得御意候、以上

八月十七日

出石
御同席共

猶以右京書面之内表向伝奏ノ御達と相成候而は、出
 京之御手前様始御役人差押之処御案思被成候趣申越
 候条、其御趣意更ニ相分り不申、其故ハ御所向ノ御
 達被相成候儀を其表ニ而御差斗ひ御差押杯と申儀、
 御手前様始御役人共、君上江は御伺無之御取斗被成
 候儀は努々難被成儀と被存候、定而御手前様ニも其
 名跡ニ可有之、右等之処ニ不心付、か様之儀申越候
 次第、実ニ思慮分別も無之、極々下輩之申分ニは無
 之哉と被存候、兎ニ角、同人書面合点参り不申、猶
 其表ニ而も得斗御勘考被下候様被存候、以上

四〇八・一八政変を伝える第一報

(文久三年八月十九日)

京都表昨十八日出時廻し別使相達候処、^(火)か急ニ御人数
御差出し之儀申来候付、早速同席中江順達差出并御用
向有之候付致仕候間、向々江申談候様御目付江申談、
早足之ものを以、時廻し一便を以得御意候、然は唯
今承り候得は、越前公御人数押而出張ニ相成候由ニ
而、御所向大混雜之模様、俄ニ諸家御人数御差出、
御門ニ大砲相置御警衛ニ相成候趣承り候故、早速忝
人を以承合候処相違茂無之、扨々驚入候次第、依而
兼而得其意候一ノ手御人数着便早々御差出相成候様
存候、実ニ不容易次第ニ御座候、一時も早々出張候
様御取斗^(軒以下高)可被下候、右程火急之儀ニ而前方斯る御模
様之処と承り込も無之処、今朝ニ至り右様之次第と
相成候付、夫々其筋々江相伺、御警衛向御差図ニ寄
出張之心得も用意罷在候、

一 越前守御人数三万人と申事ニ而御座候、如何之御模
様ニ而御座候事哉、一向御模様相分り不申候得共、
先達来^ル押留御上京ニ茂相成可申哉之御模様も有之
事哉、種々風聞も有之候処御見合ニ相成候由ニ而、
至極其段ハ平穩ニ有之処、今朝御所向、彼是御混雜
之御模様之由承候付、忝人模様見旁差出候処、本書
ニ申達候通ニ而驚入候儀、御人数御差出し之儀も同
迄も無之事ニ候へとも、相伺候処、御用場江出張罷
在候様と申事ニ候間、急而申達候御場所江出張ニ御
座候御人数着候へ、御場所本湯寺江相詰候様取斗
候心得ニ御座候、
一 今日之処御所向之御混雜は格外之儀ニ而、御門前环
甲冑等背負毛利家之御人数馳附候様子、明日ニも相
成候へは自然平穩も可相成哉も難斗候得共、今日之
御形勢実ニ不容易御事ニ而御座候間、一ノ手御人数
御差出之儀申達候、

四〇五 八・一八政変を伝える第二報

(文久三年八月二十三日)

進啓別紙之趣唯今廻達相成候間差立申候、宜敷御承知可被下候、且又去ル十八日夜々御人数繰出し朔平御門外西之方江相詰罷在候処、昨日夕追々御静ニも相成候付御固御免、九門外昼夜忝度つゝ見廻候処、会津様御達有之候、依而御人数引取申候、先以右様御事ニ而恐悦之儀、御同慶ニ候も、別紙之趣も有之此上何等之儀出来も難斗(前以下同)御模様も内々承申候、依而程々手を廻し居候へとも一向何等之儀哉確相分り不申候へとも、長州御人数不残京地退散候様子、堂上様方ニも御立退ニ相成候御方も有之由、一向合点之行ぬ御事斗ニ而御座候、尚追々相分り次第可申達候、御固中相替儀無之相済申候、宜御申上可被下候、此上如何之異変出来も難斗恐入候御事ニ御座候、一御人数一ノ手残之分、定而出張御申談被下候儀と奉

存候、今明日之内ニハ着ニ相成候事哉と用意罷在候、併今日之御模様ニ而追々御静謐ニも相成候事ニ候得は御人数引取申談候而も宜候へ共、唯今之形勢ニ而ハ長州杯之引口も一向合点之行ぬ御事ニ而御座候間、弥之見込相立候迄ハ差置候心得ニ御座候、

(別紙略)

進啓当今之形勢之処種々探索罷在候得共、一向ニ相分り不申候得共、堂上方ニも是迄攘夷之儀重ニ被仰渡候御方様哉、又長州之面々ニハ御承知之通攘夷致し居候之処故内所ヲ押留申立居候処、如何之御事哉長州は不残引、又堂上方ニも追々御立退ニ相成候御模様有之、又小笠原公ニハ江戸方ニ而是迄攘夷無之、依而御所向甚以御不首尾ニ候処、昨日御所向御固被仰付候間、右辺之処勘考候得は、是迄攘夷押而被仰立候御方々様御不都合ニ相成候哉と被存候御事に御座候、何分ニも相分り不申候得共、江戸御趣意之通ニ相成候事哉と被存候事ニ御座候、

四〇六 堂上下向、多田弥太郎らの消息

上田市立博物館旧文書

一筆啓上仕候、秋冷相募申候処、益御安恭被成御勤奉
 恐喜候、然者中条右京ノ書面、井上藤兵衛江向ケ差立
 候由ニ而同人ノ今便差立候ニ付開封仕候処、御手前様
 方御名前茂御座候付、懸差主申候、御落手御披見可被
 成候、御所内誠大變、七人之堂上長州江御下向相違無
 御座、弥太郎・甲太郎義（儀以下同）も一旦大坂江罷出候得共、三
 条西様被仰出候儀も有之趣ニ而、長州江罷出候趣之書
 状、弟金四郎持参仕候ニ付、助太夫殿江差出置申候、
 定而御承知被為在候義と奉存候、右之段申上度如斯御
 座候、猶後便可申上候、恐惶謹言

八月廿九日認

堀 丹宮

仙石織人様

早川庄兵衛様

四〇七 多田の上京、仙石家の名折れになるやも

上田市立博物館旧文書

以書面啓達仕候、冷氣之節御安恭被成御座、珍重之
 御義（儀以下同）奉存候、然者多田氏ノ此方出之書面只今著仕候之
 処、尤此度之次第者不存候様子ニ御座候、右ニ附、主
 殿之義、為皇国之誠忠之処、依之是迄主殿へ御面会之
 諸藩、其外出入茂無之人々、当所ニ有之向申ニ可及面
 々之在所ニ有之人々迄茂上京ニ而参殿可被致之事、依
 之多田此度上京茂私之心ニ而者其御主仙石家之御名折
 ニ茂相成様子候、拙者ノ茂以書面申入候、猶又荒木様
 江茂御申上之上、早々御国方御申被入候様奉願候、右
 御上京茂無之候時、姉小路殿一門沢主水正殿へ茂、并
 大坂御謁見之節、諸藩一般人々へ茂面目茂無之候間、
 依之申入度旨 如斯也、

仲月廿一日

四〇八 多田弥太郎討留届出書 (元治元年四月七日)

御名元家来
当時浪人
多田弥太郎

右之者去亥八月十八日於但馬国出石表出仕候処、当月廿八日同国養父郡宿南村ニ而、兼而為探索差出置候讚岐守家来之者召捕、出石郡暮坂村迄召連罷帰候処、途中及乱妨手余り候ニ付、無拠討留右死骸在所江引取置候旨申越候ニ付、此段御届申上候、以上

三月十四日
御名家来
平尾吉右衛門

四〇九 年寄・中老ら減知免職、仙石鋭雄謹慎

『仙石家譜』久利公譜

(元治元年)
三月十四日、仙石織人・早川庄兵衛・中老堀丹宮役儀赦免、織人ハ五十石減知城代席、庄兵衛ハ蟄居家督八十五石与へ、丹宮ハ二十石減知物頭格を命し、且鋭雄へ五日間謹慎閉門を命す

*多田弥太郎暗殺の挙に対する藩主久利の怒りの表現で

あろう。幕府へ届け出たと同じ日に、この処分が発令されている。当時久利は出石に在城中であった。

4 幕末期、揺れる出石藩政

四一〇 出石藩、鞍馬口・下鴨口警衛

(元治元年四月十一日)

仙石讚岐守

鞍馬口・下鴨口御固、丹羽左京大夫御免、代其方江被仰付候間、可得其意候、尤生野表江差出置候人数は引払候様可致候、

四一一 加藤弘藏、開成所出向許可 (元治元年七月十四日)

進啓去月廿八日御老中様井上河内守様御留守居御呼出ニ付、吉右衛門罷出候処、別紙之通御書付御渡有之候ニ付、請置罷帰、左之通御談申上置候段申達、

仙石讚岐守家来

加藤弘藏